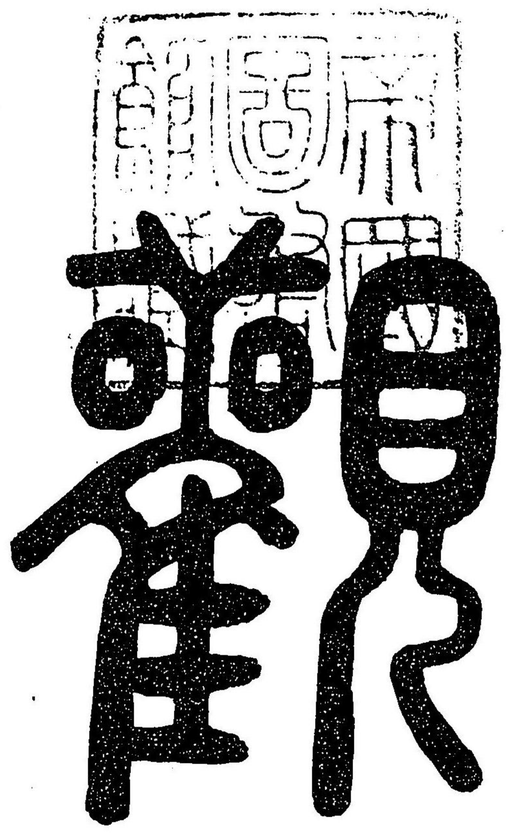
菅公一千年祭紀念

太宰府名所誌

福岡

積善館發兌

菅公會長侯爵黑田長成公題字



水戸

源長成

太宰府碑所見

太宰府の人古系一乃斉国なる據言を傳へ曰く
太宰府八菅公謫遠一乃筆みて主命を成すと
然るに明年八太宰府に於て菅公乃一乃筆墨を
乗行見たりと今ハ中之ものを為めに盛大なる準備
をなしつゝあるの和して文物に於ても近
来菅公乃呼ひ殿次第に高く遠に海内乃視線を
して著しく太宰府に集中するに至りたる乃勢

太宰府

源長盛

太宰府名所誌序

太宰府の人古来一乃奇異なる豫言を傳へ曰く太宰府六菅公殘後一千年乃一千年祭を然る明年八太宰府に於て菅公乃一千年祭を擧行乃ことゝ今や之もの為めに盛大なる準備をなすことゝなり而して文檀と に於ても遠来菅公乃呼ん殿次第に高く遂に海内乃視線をして等しく太宰府に集中せしめんとする乃勢

ゆゑ事已に此の如きなる以上は明年の一千年祭に際しては必ず無數の人太宰府に麕集し遂に波乃奇異なる豫言を實現せんきや測た疑なきなり然るに太宰府の地たる有名なる古跡多く一事に足を容るゝなく左顧右顧感慨を催さしめらるゝ若し夫れ菅公の事蹟に關するものを論ずれば其他輕忽に看過すべからざるものゝ多きは蓋し少しとせざるべし例へば都府樓の古跡の如き觀世音寺の如き横岳の崇福寺の如き學業院の舊地の如き四王院無量寺若屋城等の遺趾の如き皆討尋して古を徵すべき所なり然れども我輩太宰府の歴史を知らざるのみならず倉卒其他に暇なくして唯青山室に遊び清渓自ら流るゝを見るのみ何ぞ以て其の一古跡の所在を知る能はんや是れ一篇の案内書を要する所以なり古来太宰府の案内書と云へば

故公像
（帝國教育會藏）　（渡邊邦彦）

きふ[illegible]ふ[illegible]其書已に坊間に売しく且つ今日に遠せ[illegible]是まを遺憾とせるの人項日積善館主人辻本卯蔵氏新に太宰府名所案内を作りて御を余に屬を余乃ち其擧の時を得たるを喜び偶感する所を抑多を以て序となす此書堂に於ける奇異なる縁言を實現せる乃一具たらんとせんや

明治二十四年十一月十五日　井上哲次郎識

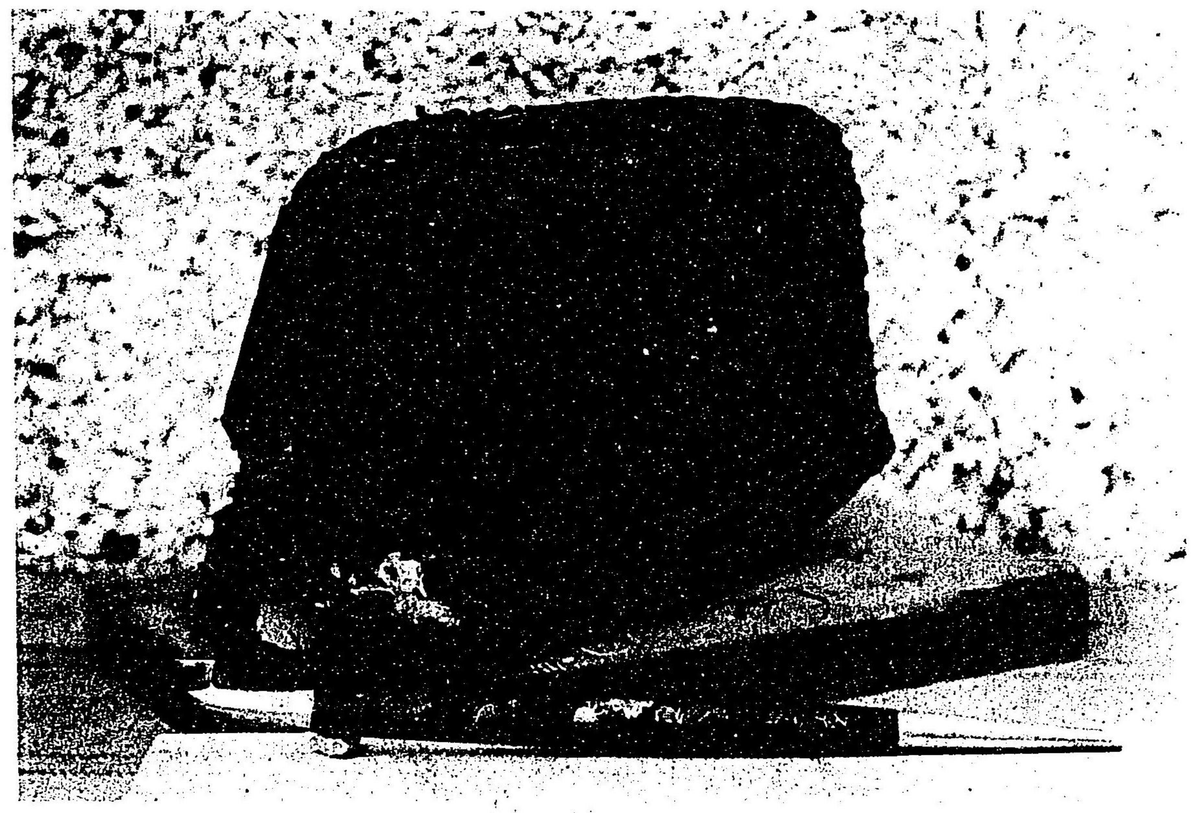
菅公像

（帝國教育會藏）　（雅邦謹寫）

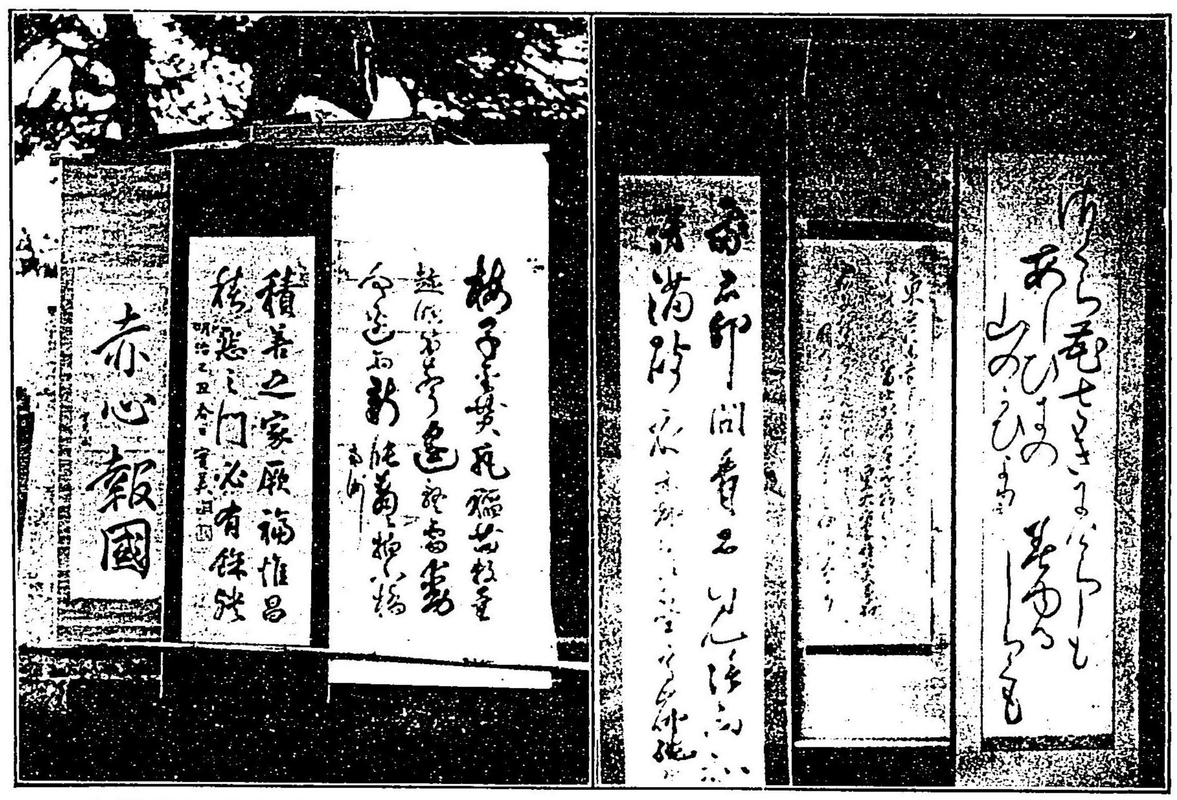
[illegible]書を以て[illegible]
つ今日小達[illegible]是[illegible]遺憾[illegible]
善鎮[illegible]人迂[illegible]卯歳[illegible]新[illegible]太宰府[illegible]所[illegible]
[illegible]を余に[illegible]余乃[illegible]東京の時を[illegible]
喜び偶感[illegible]而[illegible]
小[illegible]波の[illegible]異[illegible]緣言[illegible]
[illegible]

明治[illegible]年[illegible]月十五日

[illegible]

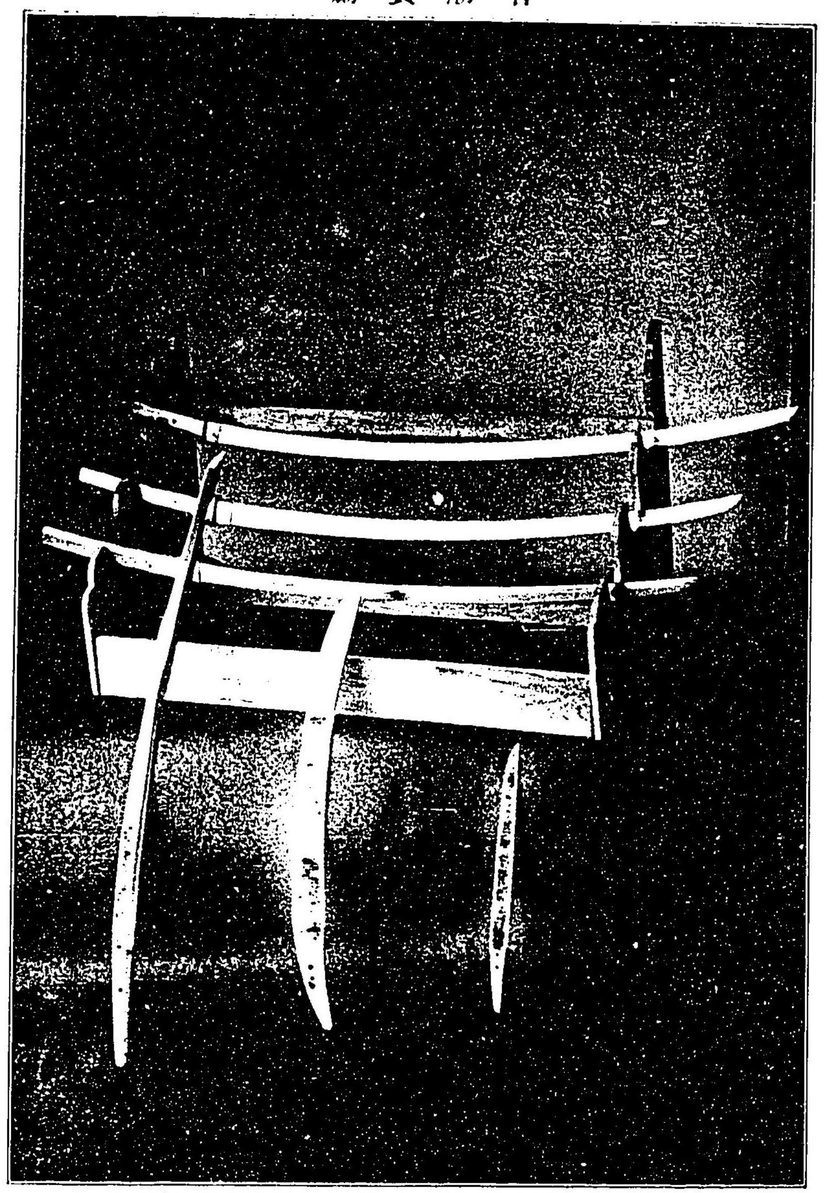


孝仁天皇御陵烏帽子　　孝明天皇御陵菅

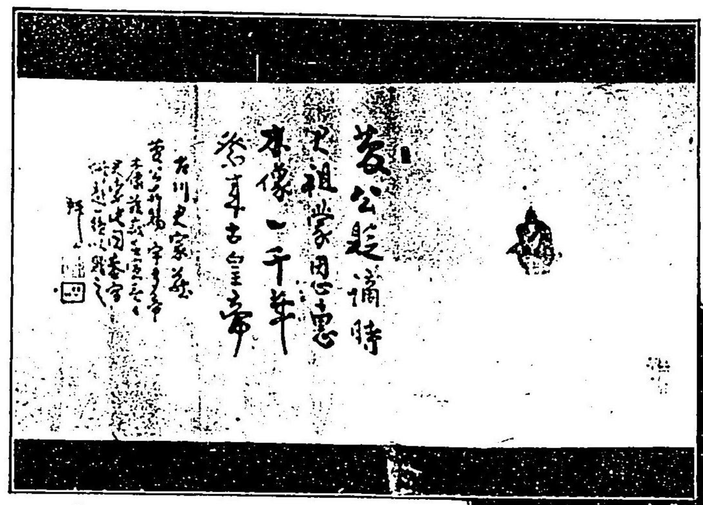


西三條季知公書　高山彦九郎書　西郷南洲書　三條實美公書　全實滿公書

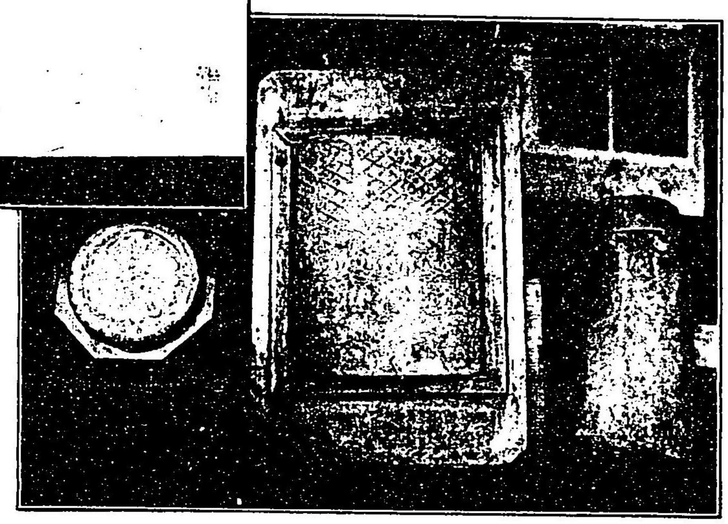
菅廟寶劍



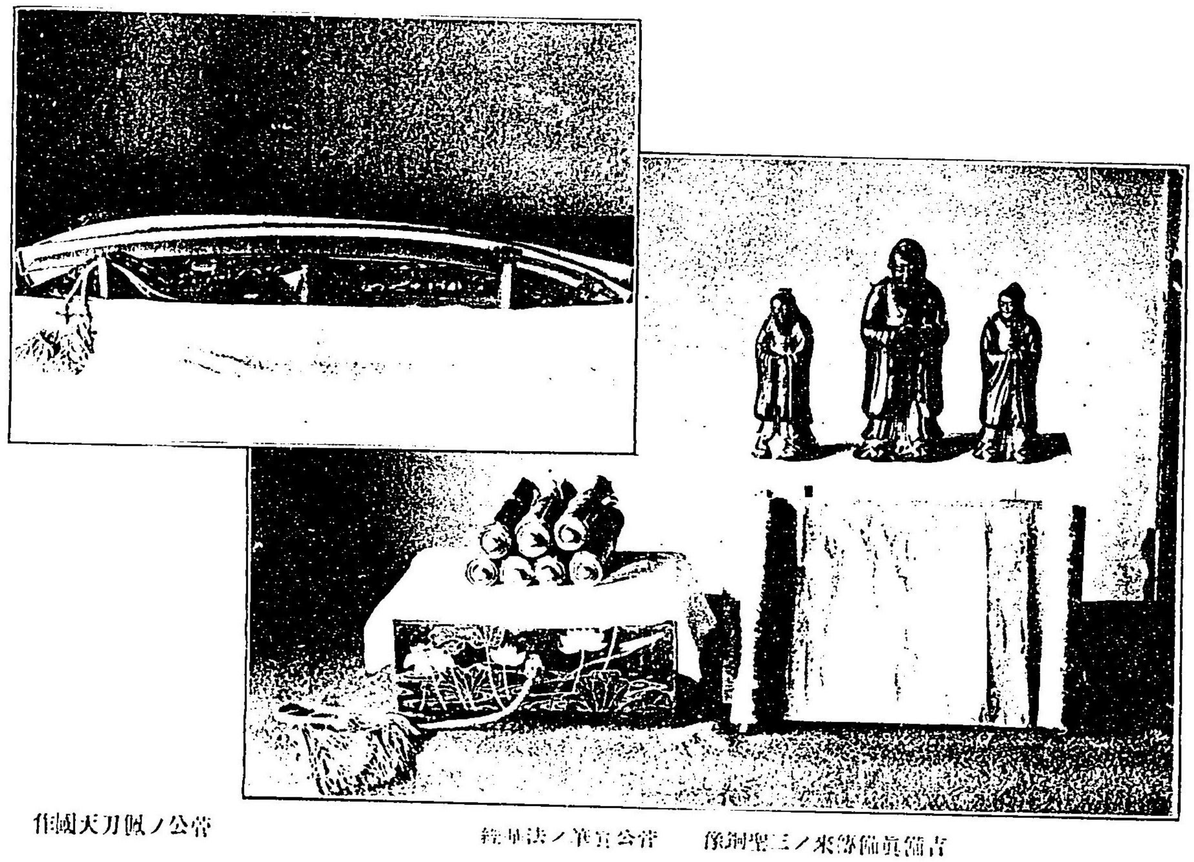
正村 宗正 國信　　平包　　近宗治鍛小條三　　平行



宇多天皇ノ像菅公自作ナリト拜詣
寫山分寸



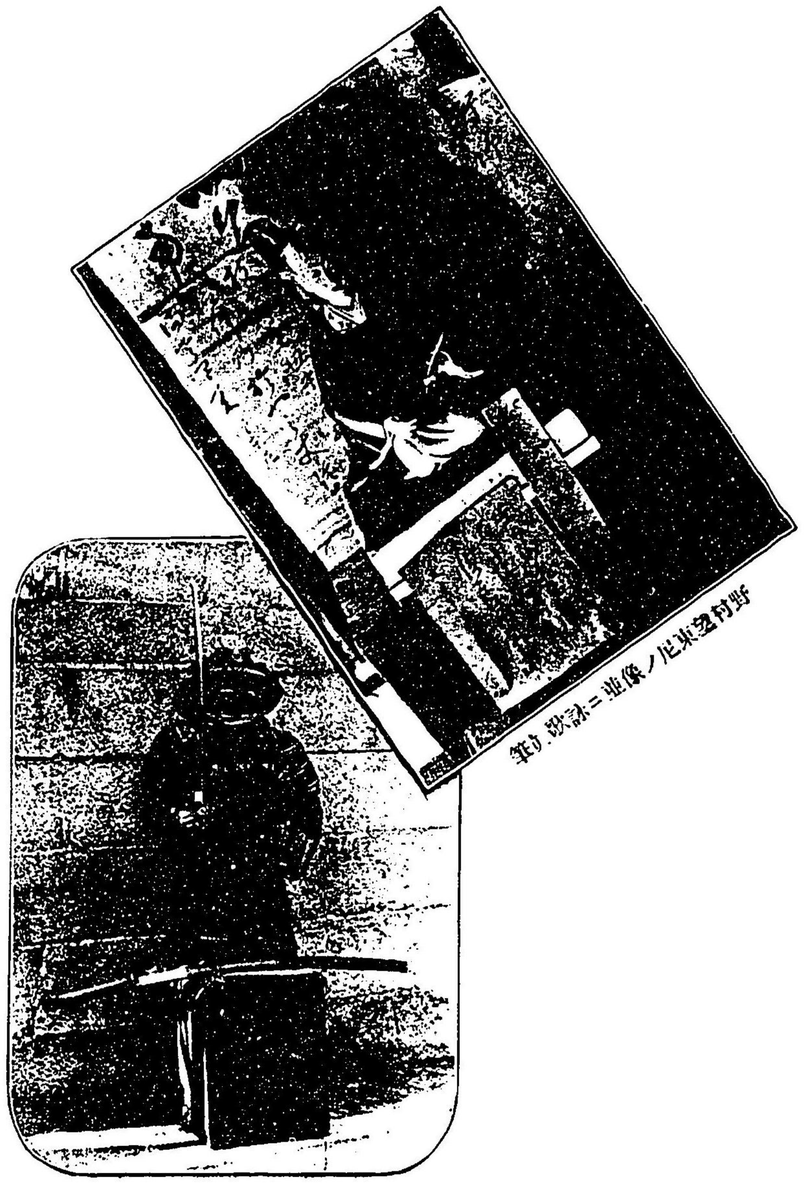
東久世通禧旧ノ書　三條實美公ノ書
瓦ノ櫻府都



作國天刀佩ノ公菅　　經華法ノ筆宣公菅　　像銅聖三ノ來渡佛眞福吉

小野道風筆觀世音寺ノ扁額

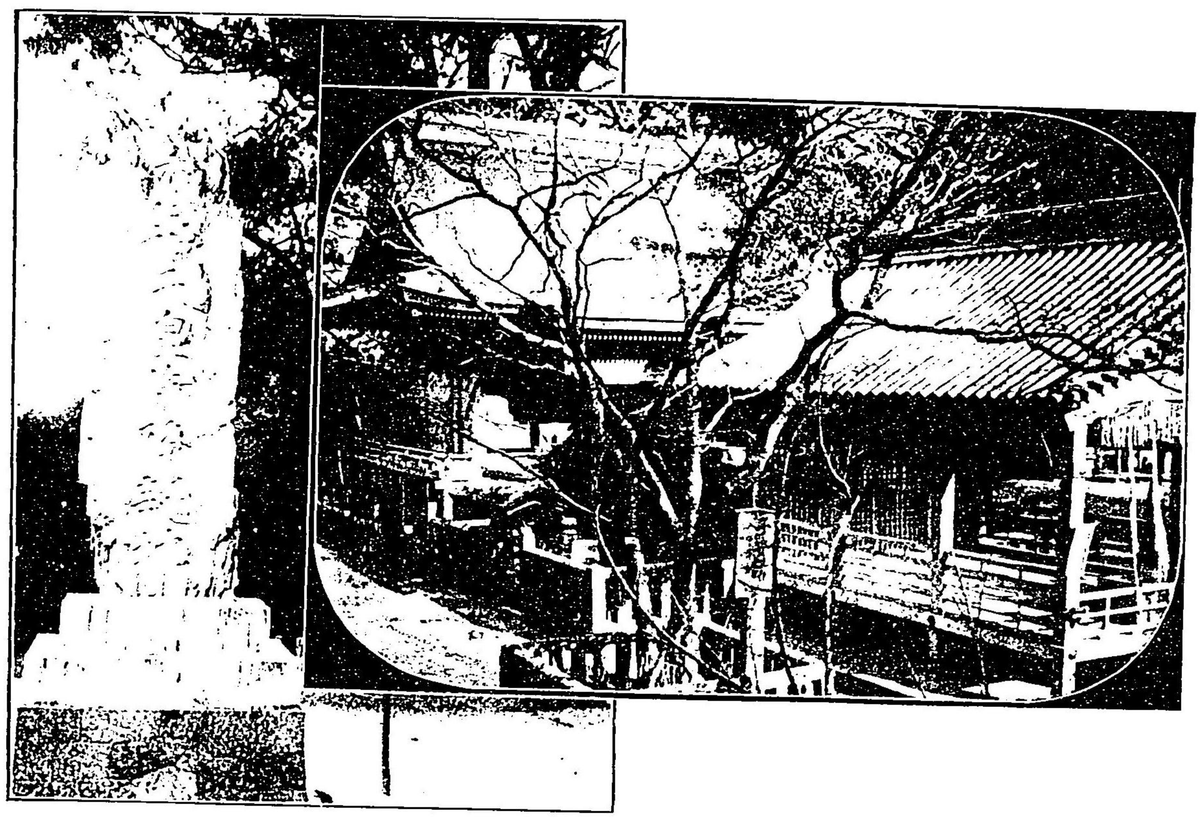
劉世儒筆月梅ノ圖



二條公用ノ甲冑

鈴木歌詠ニ並像ノ尼光空村野

牛頭明王並ニ安德天皇ノ靈



宮幡八美字

梅ノ掛金

松ノ栽手公條三

凡例

一、本書は、太宰府附近の名所舊蹟を、筑前續風土記、全拾遺、筑前地理全誌等に據り、繁を省き、要を摘み、尙實地に參照して是を編纂し、務めて正確ならんことを期せり、

一、本書は、名所舊蹟を、觀覽せん人の、栞とし編纂せるものなれば成るべく行程の順序により記載し、又其方位及距離を示せり「例へば觀音寺は太宰府の西方何町」と云ふが如し、且つ猶其便ならんことを計り、卷首に略圖を掲ぐ、

一、本書は、菅公に關する遺蹟は成るべく遺漏なく記載せり、左れども俗說にして、徵證なきものは、悉く省けり、

一、本書に記載せる名所舊蹟にして、或は一覽するに足らざるものありと雖も、其太宰府に接近し、又は有名なる名所舊蹟に、近接せるものは、悉く記載せり、

一、本書に、二日市驛、原田驛等記載せるは、鐵道停車場を指せるなり、昔時に稱する驛家の義にはあらず、

太宰府名所誌目次

菅公小傳……一
官幣中社太宰府神社……九
安行社……一三
威德寺……一四
染川……一四
岩蹈川……一六
思川……一六
小松重盛墓……一八
金掛梅……一九
巽山八幡宮……二一

血方持觀音……二二
原山寺址……二二
篭門山……二三
官幣小社篭門神社……二七
金剛兵衛盛高墓……二八
松峽宮址……二八
小武氏城址……二八
有智山寺址……二九
智光寺址……二九
崇福寺址……三〇
觀世音寺……三一
戒壇院……三二
山王社……三三
僧玄昉墓……三四
太宰小武武藤資頼墓……三五
學業院址……三五
大宰府址……三六
大城山……四六
四天王寺址……四七
岩屋城址……四八
善勝寺址……五三
刈萱關址……五四
國分寺……五五
水城址……五六

衣掛天神……五八
榎　社……五九
三條公手栽松……六〇
幸　橋……六一
隈廻呂墓……六一
高橋紹運首塚……六二
白　川……六三
漆　川……六五
紫……六五
天拜山……六六
天拜山下宮……六七
龍王瀑布……六八
相生松……六九
武藏寺……七〇
武藏温泉……七三
蘆城驛址……七六
雨　山……七九
續命院址……八〇
城　山……八〇
筑紫神社……八二
御笠森……八三
御　陵……八四

太宰府名所誌

菅公小傳

小野隆助
高原謙次郎 校閲
江島茂逸
松尾光淑 著

嵯峨たる天拜山上、菅公の德日月と光を爭ふとは、衆議院議員久米民之助の題せる所の碑表なり、巍然たる菅聖廟頭、斯德維馨るとは、武英殿大學士潘聖恩の書せる所の扁額なり、菅公の德、何故に斯く隆なる歟、如何なる寒村僻地も、菅公の祠のあらざるなく、如何なる小女幼童も、菅公の尊ぶべきを知る、神威海内に耀き、信者都鄙

に充つ、菅公の德、何故に斯く盛なる歟、嗚呼公は果して如何なる人なりしぞ、

天照皇大神の第二の御子を、天穗日命と申奉る、命より十一代の孫を野見宿禰といふ、垂仁天皇の徵に應じ、當麻蹶速と力を角べて之れを倒しぬ、是我國角力の始めなり、宿禰また殉死を禁じ、土偶を以て之れに代へんことを請ふ、天皇之を嘉みし、土師といふ姓を賜りぬ宿禰より十三代の孫を古人といふ、大和國菅原の里に住す、故に敕許を得て菅原を以て姓とす、古人の子を清公といふ、清公の子を是善といふ、皆博學にして操行高潔、相繼ぎて文章博士となり、大學頭となれり、

菅公、小名を阿呼と稱す、是善の第三子なり、仁明天皇承和二年六月廿五日を以て生る、容止閑雅にして天質穎悟夙に神童と稱せらる、始めて文章生島田忠臣に就いて業を受く、十一歳の春の頃、一夕月

清く梅白し、父是善、忠臣をして、公に詩作を試みさせられしに、

月耀如二晴雪一梅花似二照星一可レ憐金鏡轉、庭上玉房馨、

いふ詩を作り給ひぬ、十五才の春、元服して名を道眞、字を三と稱し給ふ、十八歳の時、文章生となり、二十三歳の時、文章得業生となり、下野權小掾に遙任せらる、二十六歳の時、對策及第して小內記に任せられ、又幾何もなくして、式部小輔に任じ、文章博士を兼ぬ、（此に於て菅家四代連續して博士を出せり世以て希世の榮とす）仁和二年讃岐守に任せらる、后宇多天皇即位し給ふに至り、公を式部少輔に再任し、左中辨、藏人頭に任せられ給ひしが、后累進して春宮大輔、民部卿、權大納言、右近衛大將等に任せられ氏の長者とならせ給ふ、醍醐天皇の泰昌二年、右大臣となり、仝三年正月には關白太政大臣の內命を受け給ふに至りぬ、其治體に通達し給ひしを知るべし、又武術にも通じ給ひしことは彼都良香に學ばれし時射的せられしにても知るべく、又遣唐使に選ば

れ給ひし時、其廢止說を提議し給ひし時も、唐若し怒りて來寇せば、臣に九州の兵符を借し給はば敵國を降伏せしめんと、何ぞ其議の武斷なるや

而して文學は公の本領にして、其博學なること古今類少し、また佛學にも通じ給へり、醍醐天皇、未だ東宮におはしける時、二尅の間に二十首の詩を題し献じ給ひしことあり、渤海大使裴廷も、公の詩を見て白樂天の風ありと賞せり、公また嘗て、父祖三代の家集を編して献せらる、天皇叡感ありて、更に菅家の白樣に勝るありと、のたまひしことあり、其編著多き中に、類聚國史、菅家萬葉集、菅家文章の類、普く世に行はる、文德實錄、貞觀格式の撰も、公の最も力を盡されたる所なり、和歌は歷代の敕選に上れるもの多く、書は王羲之の風を得給へり、又自から彫刻をも爲し給へり、嘗て母大伴氏の遺言により觀音の像を刻み給ふ、又天拜山下宮なる御神像も公

の自作なりといふ、斯く公は萬技に通じ給ふのみならず、誠忠の志深く、操行高潔なりしかば其不次に登用せられ給ひしとも、宜なりと謂ふべし

昌泰三年九月九日、重陽の宴に、天皇秋思といふ題を給ひしかば、献じ給ひし律詩の後聯に、

君富二春秋一臣漸老、恩無二涯岸一酬猶遲、

とありけるを、天皇深く叡感ましく〳〵て御衣を賜ひぬ、時に藤原時平、左大臣たり、時平は大職冠鎌足公七代の嫡孫にして世々攝關の家たり、然るに公の德望日に高く、又己れを踰えて大政大臣關白たるの內命を受け給ひしを聞き、窃かに源光、藤原定國、藤原菅根等と相謀り公を貶せんことを謀る、是より先き、公の女齊世親王の妃となれり、時平等乃ち公の天皇を廢して親王を立てんとの志ありと奏す、天皇御年未だ若く、特に皇后は時平の妹なりしか

ば、内外の讒に惑はせ給ひ、延喜元年正月廿五日、公の右大臣右大將の職を停めて、太宰權帥となし太宰府に謫し給ふ、公の御子にして長せる四人の君達もまた各所に流され給ひて、公は僅に幼少なる君達二人をのみ具し給ふを許さる、公の悲しさ如何にぞや、即ち和歌を献りて宇多法皇に訴へ給ふ、

流れ行く我身藻屑となりぬとも君柵となりて止めよ、

法皇大に慈き自ら泥をふませ給ひて清涼殿に入らんとし給ふ、菅根門を閉ぢて入れまつらず、

然るに公は二月朔日、家を出でゝ謫所へ赴き給はんとし常に最も愛し給ひし紅梅殿の庭の梅を見て

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ、

此歌より梅は飛びて筑紫に至りしといふ、今に聖廟の傍らなる飛梅は是なり、公旅中の情を述べ給ひし二十八韻の中に

自從敕使驅將去、父子一時五處離、口不能言眼中血、俯仰天神與地祇、

太宰府に着かせ給ひて

離家三四月、落涙百千行、萬事皆如夢、時々仰彼蒼、

また不出門といふ題中に

都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲、

の句あり、又特に悲哀なるは去年の重陽の宴を思ひ出でゝ今昔の情に堪へず、

去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香、

と、公は斯ばかり憤るべき逆境に陥りながら、至誠君を恨みざるのみならず、日々御衣を捧持して、君恩の優渥なりしを追懐せり、其心緒の悲壯なる千歳の下覺えず襟を濕すの感慨あり、是れ寔に萬世

人臣の龜鑑として尊崇せられ給ふ所以なり、

斯くて公は、延喜三年二月廿五日、御年五十九歳にして、配所（今の模社の地なり）に薨じ給ふ、遺命により安樂寺の境内に葬りぬ、今の神廟是なり

此後打續きて京師に災あり、或は颶風雲を捲き、或は雷電霹靂する等の事ありて、藤原菅根は俄に病死し平希世は落雷の爲めに震死し、續きて時平も薨じ、東宮もかくれさせ給ひ、時平の長男保忠、三男敦忠も相繼ぎて身まかり、源光は落馬し泥中に沒して薨せられければ、世人皆公の寃罪に處せられ給ひし崇なりと評せり、天皇も深く後悔し給ひて延長元年公の左遷の文書を悉く焚棄てられ、本の官位に復し更に正二位を贈られ、後又正一位大政大臣を贈られ、四人の君達も各復官歸洛せしめ給ふ、後子孫繁榮し、瓜瓞連綿として繼續せり、今の東宮侍從長高辻子爵は實に其嫡孫なり

嗚呼我國古來賢人哲士に乏しからずと雖、而かも博學明識にして誠忠金石を貫き、德器圓滿にして技能完備せるもの公を以て最とす其祠宇の海内に普く、其神德の日月と光を爭ふも、偶然に非るなり、

官幣中社太宰府神社

形勢四海に冠絶し、靈驗一天を皷動すと、大江匡房卿のいへる、太宰府神社は、贈太政大臣正一位菅原道眞公の廟所なり、公は、延喜三年二月二十五日、配所に薨す、遺命により天原山安樂寺の境内に葬りぬ、仝五年八月十九日、公に扈從して來りし、昧酒安行、墳墓の上に、祠を建て香花を供ふ、是公を神とし奉祀せし濫觴なり、此年醍醐天皇、安行に敕して、社殿を造營せしめらる、仝十九年藤原仲平に敕し更に紫宸殿に摸して、神殿を改築せしめらる、後十五箇年を經て漸く落成す、其壯麗なりしを想ふべし、延長元年、右大臣に復し正二位を贈り、貶謫の宣旨を燒捨てしめらる、永延元年、天

滿大神の敕號を賜ふ、後天滿宮と追崇せらる、正暦四年八月、從一位左大臣を贈り、仝年十二月、正一位太政大臣を贈らる、爾來歷朝の奉幣、絶ゆることなく、祠宇全國に普く參する者常に絶えず、神德の隆なる千古其比儔を視ず、

養永二年、平氏の一門、安德天皇を奉じて、太宰府に到り、宗盛以下神廟に參せしこと、平家物語に詳かなり、降りて慶長年間、國主黑田長政入國の後、其父如水此神社の傍（今の南神苑なる池畔なり）に閑居され、常に神社を尊崇し、祠官を優遇せられければ、慶長九年三月廿日如水身まかれられし後は、祠官等其惠みの厚かりしを感じ、年々追懷の爲め、連歌の會を催すこと今に絶えず、

元治二年二月、維新元勳、三條實美、西三條季知、東久世通禧、四條隆歌、壬生基脩の五公卿、周防三田尻より、本社の別當、延壽王院（現今の宮司男爵四高社家）に遷り、慶應元年十二月、復官歸洛し給ふまで殆んど

三歲、此處に淹留せられぬ、よりて薩長其他憂國の志士、窃かに此地に會し維新鴻業宏謨を計畫せり、實に當時の太宰府は、德川幕府に對し、隱然一大敵國にして、王政維新の原動力は、此廟畔にありしなり、明治三十三年には畏こくも皇太子殿下御行啓遊ばされたり而して社殿屢々造營せられしが、現今の神殿は、天正十九年小早川隆景の造營にして、樓門は石田三成、廻廊及反橋等は黑田長政の建築なり

匡國英謀待偉人、無如群小黨讒臣、相門去權兵塵沸、始信與衰繫一身、　菅茶山

千里飛梅一夜松、土人迎客說靈蹤、坐來憶起當年事、落日觀音寺裏鐘、　賴杏坪

凌雲有翼列三臺、遺恨丹心遂作灰、天上仙才早攀桂、人間芳蹟有飛梅、德輝高照西都月、寃語空傳北闕雷、請看威靈長眄響、崇祠千載鬱崔嵬、

日柳燕石

偉然廟貌倚崖巍、憶起當時悵且哀、從古天地產蛙黽、于今街巷說風雷、觀音寺古鍾偏鑑、都府樓空瓦亦灰、惟有余馨消不盡、年々春信到宮梅、

梁川星巖

菅公家世屬儒林、偶拜崇祠景慕深、遶砌梅朽無俗樹、戲池鴛鴦有嘉音、祀同關帝施朝野、名亞宣尼照古今、却憶土師會止殉、果然餘慶見天心、

廣瀨淡窓

東久世通禧

客裡光陰夢裡流、蘸紅新綠望悠々、書甍鶯轉菅神廟、殘礎花落都府樓、芳酒玉樽思舊侶、茅鞋藜杖慕新遊、少年易老懷難述、空送春歸奈旅愁、

安行社

太宰府と云はゞ、歷史上必ず菅公を連想すべし、菅公と云はゞ、また必ず味酒安行を連想すべし、菅公の誠忠は云ふも更らなり、安行の赤誠、千載の下誰れかまた涙をそゝがざらん、

味酒安行は、武內宿禰十一世の裔にして、菅公の門生なり、延喜元年、菅公の西遷に隨從し、常に左右に侍して恪勤怠らず、公薨去の後、塋を墓前に築き、奉仕すること生るに仕ふるが如し、三子あり、善く父の志を繼ぎて僧となり、奉務益勤む、其子孫連綿として內殿式を擧り、滿盛院、檢校坊、勾當坊の三宮司是なり

此安行を祭れる小祠、太宰府町三條にありて、太宰府神社の境外末社たり、

威德寺

菅廟の南方にありて、いと近し、臨濟宗東福寺派にして、本尊は釋迦佛なり、嘉元々年、鐵牛圓心和尚の開基なり、世にいふ渡宗天神も此寺に祭れり、此寺の西方、巨岩の上に、觀世音の石像を數多安置せり、其下に古き塔あり、傳衣塔といふ、是無準禪師より傳へし衣を埋めたりしものなりと云ふ、

染川

傳衣塔の前なる小川なり、愛染川ともいふ、細川幽齋の九州道記に「染川を里人に尋ねて、見に行き侍るに、思ひしには、かはりたる小川の淺き流れなり」と誌せるは則是なり、

詠者不詳

染川を、渡らん人の、如何でかは、色になるてふことなかるべき、

伊勢物語

藤原忠直

後撰集

筑紫なる、おもひ染川、渡りなば、水や增らん、淀むときなく、

家集

源重之

染川の、岸によりくる、白波は、聞にもたかふ、色こゞ有ける、

拾玉集

大僧正慈鎮

暇もなく、落る涙のつもりては、愛染川と、なりにける哉、

新拾遺集

大僧都信聰

如何なれは、人に心をそめ川の、渡らぬ瀨にも、袖ぬらすらん、

九州道記

細川幽齋

老の波、昔にかへれ、染川や、色になるてふ、心ばかりも、

世の爲めと、深くも思ひ、そめ川の、水の心は神やくむらん、

三條實美

鏡なす、水に心を染川の、清くも世をば、渡りてしがな、

千家尊福

岩蹈川

菅廟の北にあり、彼應神天皇、御降誕の地なる、宇美神社へ通ずる道筋にある則是なり、

宇美山を、夕越くれは、御笠なる、岩蹈川に、駒なつむなり、

爲頼

神こそは、くみて知るらめ、筑紫なる、岩蹈川のいはぬ、思は

千家尊福

思川

太宰府の西にありて、石蹈川の下流なり、古へは此川、太宰府町の上より別れ、町下にて、また會して一流となれり、故に思川と稱す、此川邊大なる螢多し、

後撰集

思川絶えず流るゝ、水の泡の、うたかた人に逢はで消えめや、

伊勢

新敕選集

思川、岩間に淀む、水莖を、かき流すにも、袖はぬれけり、

皇嘉門院

仝

更け行けば、同じ螢の思川、ひとりはもえぬ、影や見もらん、

左兵衛信家

身にあまる、惠みに逢ひて、思川、嬉しき瀬にも、立かへる哉、

三條實美

汲み知らぬ、人はあらしな、思川、うき瀬に立ちし、心つくしを、

千家尊福

小松重盛墓

太宰府、新町の北、思川の傍に小祠あり、小松重盛の墓なりと、祠中墓石に、小松内大臣重盛公墓、正平二年建立と誌せり、重盛は治承三年に薨せり、たれは百二十年後に於て、之を建てしものならん、平家物語に、平貞能は、重盛の骨を收めて、傍土を加茂川に流し、高野山に至る、末頼母からずと思ふにや、東を指して落ち行き、宇都宮を頼みたる由、誌したれど、日本外史には「宗盛擧族帝を奉じて西す、平貞能が攝津より歸るに會ふ、貞能馬より下り跪きて曰く、諸公何くに往くと、宗盛故を告ぐ、貞能其不可なるを諫む、宗盛聽かず、貞能獨京に入り、重盛の墓に詣でゝ曰く、君豫め今日あるを

知る、願くは恢復を圖れと、且日墓を發き骨を收めて西す」云々又仝書に「貞能其後髮を剃り、重盛の墓を拳じ、常陸に隱る」と左らは貞能が重盛の骨を奉じて、高野に西海に常陸に行きしを知るべし、壽永二年、安德帝太宰府に蒙塵し給ひし時には、貞能は勿より隨從し奉りければ、此時重盛の分骨を、此地に埋葬せしを、後人墓碑を建てしものなるべし、

金掛梅

太宰府町五條、古川氏の底内、天滿宮の祠畔にあり、古川氏は宮成宿禰七十余代の後裔にして、開家以來一千六百餘年、此地に住せり、明應の頃、古川勝時と云ふ人あり、夙夜勤儉終に巨萬の財を畜ふ、時に凶歲に遇ふ、勝時大に財を投じ、凍餒者を賑はし、以て至樂と爲せり、斯を以て家業大に衰へ、其子家を嗣ぐに至りて、妻子飢餓

に泣くに至る、然るに或日、同家所祭の天滿宮畔の梅枝に、黄金の一囊を掛るあり、時人評して、積善の餘慶天の賜なりと爲せり、是より此梅を金掛梅と稱す、降つて文化年中に至り、枯木となりしが、其一枝より芽生ひ花開き、奇香馥郁たり、世人皆之れを奇とす、當國主を始め、隣國の諸侯等も、來觀せられしと、因に記す此祠の神体は、菅公御自作のものにして、宇多帝の尊像なりと、

三條實美

梅か枝に、かゝる黄金の、花もまた、根にかへりてや、咲出つらん、

東久世通禧

散るとは、知らぬ老木の、梅の花、ふたゝび三度、立榮えつゝ、

壬生基修

天みつる、神の惠を、かけまくも、畏しく匂ふ、梅の下風、

此宿の、榮えかをくる、梅なれば、匂はん末の、かきり知らずも、

西三條季知

巽山八幡宮

太宰府、五條の東南、小丘の上にあり、傳へいふ、往昔宮成連といふ人、仁德天皇の御宇、此地に八幡宮を奉祀す、后此傍近の地、豐前宇佐八幡の神領となり、現今の五條と稱する處も、宇佐町と稱せり、宇佐宮大鏡にも、筑前國府中宇佐町とあり、此宮近き頃迄は、老松古杉蓊鬱として、自から古祠の狀ありしも、伐採して、今は唯僅かなる石祠を存するのみ、

紛々松子落、颯々暮風吹、寂莫無人祭、白雲銷古祠、

吉嗣拜山

血方持觀音

太宰府より、榎社に通ずる路傍に、蒼鬱たる榎樹あり、其下に石佛あり血方持の觀音と稱するは則是なり、傳え聞く、延喜の頃、宮成某の室、菅公の恩惠により、宿痾全治す、其后此人の墓に石佛を建て、血方持の觀音と崇むとかや、毎年八月、菅神の御輿、榎社に渡らせ給ふ時には、音樂を停む、是往昔太宰權帥以上の官人、此處にて神輿を迎へ奉りし故なりとぞ、又竈門山の脩驗者、入峰の時は、必ず此處にて脩法せしと、

原山寺址

太宰府神社の北方、原と稱する處にあり、是四天王寺（此寺のこと別項にあり）の別院、原山無量寺の址なり、菅公薨去の時、此寺僧も其葬事に奉仕せ

も云ふ、滿山危巖絶壁にして形勢雄偉、良工の削れるが如く、登臨するにたえたり、山中に五水七窟、其他靈蹟多し、山頂に祠宇あり、玉依姫命を奉祀す、天武天皇の御宇、心蓮上人寺を創立し寶中寺と稱す、後繁盛して三百七十坊の多きに至り、役小角及傳敎弘法の二大師も登山修法せり、

天文二十三年、太宰大貳大内氏滅びしより、豐後國主大友宗麟、當國を領し、寺領を檢地課稅す、是に於て寺院頓に衰頽せり、天正十五年、豐臣秀吉、島津氏を征し、凱旋の時、登山して、三層の高樓を建しと、后小早川隆景、黑田長政共に神領を献し、神社佛閣を建立せしが、寛文十一年、火災に罹り、一山の坊舍烏有に歸し、古文書古器物等皆灰燼となれり、よりて再び建築せしが、明治維新の際皆廢滅するに至れり、

しを以て、此寺院廢滅の後皆菅廟の祠官となれり、所謂原八坊是なり、其首を華臺坊といふ、寺址の傍らなる山を岡見山と號す、旱歳の時此山上にて雨を祈る、此法傳敎大師の遺法なりと、寺院は何時の頃よりか廢れて、荒野蕪田と變せり、

元弘三年五月、少貳貞經、都督一品親王を此寺に奉せり、又建武三年、賊將足利尊氏軍破れて、九州に走りし時、其弟直義と共に、此寺に陣せしこと梅松錄にあり、后九州探題一色道猷も、此寺に陣せし由、菅廟の願書に見ゆ、左れば當時は、頗る巨刹なりしを想ふべし、

竈門山

太宰府神社に詣でたらん人は、其東北に、嵯峨として萬古の蒼翠を凝らせる高山を見るべし、是則竈門山にして、寶滿山又は御笠山と

筑紫へまかりける時に、竈門山の麓に宿りて侍りけるに、道の邊に古く書付て侍りける、

清原元輔

春は燃え、秋はこがるゝ、竈門山、

とありけるに書付ける、

霞も霧も、煙とぞ見る、

新續古今集

藤原經衡

筑前の守にて侍りけるに、日の甚く照りければ、竈門神社に雨を祈るに鏡を奉るとて、

雨ふれと、祈るしるしの、見えたらは、水鏡とも、思ふべきかな、

現存

道信法師

散る度に、もえてがれても、惜しき哉、竈門の山の、緋櫻の花、

家集

槍垣媼

降らばふれ、御笠の山し、近ければ、簑の島迄は、さして行きてん、

大納言公任

夫木集

音にきく、富士の高峰に、あらねども、御笠の山も、煙立ちけり、

細川幽齋

九州道記

たち續く、雲を千里の、煙にて、賑ふ民の、かまど山かな、

三條實美

大空に、立ちそびえたる、御笠山、さして仰かぬ、日もなかりけり、

千家尊福

産業を、いそしむ民の、竈門山、草木さへこそ、立榮えけれ、

官幣小社竈門神社

竈門山下、内山と稱するところにあり、祭神は鸕鷀草葺不合尊の后、玉依姫命なり、

延喜式神名帳に、竈門神社一座とあるは則是なり、百練抄に、嘉祥元年、本社に正一位を授け給ふと記せり、古記に曰く、醍醐天皇、延喜元年六月廿一日、八幡大神の御託宣に竈門神は、我伯母におはしますと、應德二年官符を發せらる、其中に、竈門山大神は、九國の總鎮守なりと、天永三年官幣を捧げしめらる、其宣命に、竈門山大神は、八幡大菩薩の伯母、本朝の鎮守なりと、また久安二年、近衛天皇、宸筆の經卷を納め給ふ、其上に九國總鎮守寶滿大神と、書かせ給ひしと、

金剛兵衛盛高墓

竈門神社、華表前の路傍にあり、石碑は劍頭の狀に刻みて、梵字を刻せり、盛高は有名なる刀劍鍛冶にして、正宗の十哲たり、父を盛國と云ふ、其刀劍の瑳琢に用ゐし水、近傍にあり、甚清冷なり、

松峽宮址

竈門神社の東北にあり、是神功皇后、西征の時の行宮なりしといふ、

少貳氏城址

竈門神社の北方、九重原と稱するところにあり、太平記に、內山城又は太宰府城とあるは則是なり、往古少貳の官は、定期の年限を以て交迭せしが、源頼朝の時、武藤資頼、少貳に任ぜられしより、子孫連綿十一世、三百餘年間其職を奉せり、故に其官名を以て家號と爲せり、

有智山寺址

內山にあり、是則竈門山寶仲寺の一にして、無量敎寺と稱へしと、山門舊記に、弘仁九年、傳敎大師、太宰府有智山寺の邊りに、寶塔院を建立せり、是日本六所、寶塔院の一なりと、又元亨釋書にも、太宰府有智山寺は、西州の大講師なりと記せり、總て此近傍は、寶仲寺の寺院佛閣等ありしが、建武三年、菊池武俊義兵を擧げて、內山城を攻めし時、悉く兵火に罹りて灰燼となれり、

智光寺址

少貳氏の城址の西北にあり、智光寺原といふ、此附近を古へは小野

の里と稱せり、鳥羽天皇の皇子、眞譽法親王、此寺に住み給ひけん、西行法師の撰集抄に「過にし頃筑前の國に、さそらへ侍りしに、人の語りしは、中頃御笠郡小野の里といふ所の山中に、何處の者ともなく住渡る僧あり、山中に入りて、久壽二年三月九日、青蓮院法眼眞譽と、木を削りて書付け、歌を詠みて見えずなり侍りき」と記せり、此親王の御墓とて、奥小屋と稱する處に、一基の墓石あり、

崇福寺址

菅廟の西北、横嶽と稱する靜閑なる幽谷にあり、山號を横岳山と稱せしと、四條天皇、仁治元年、湛慧禪師（此禪師の墓も後近の路傍にあり）の開基なり、禪師の師を聖一國師といふ、國師の師、無準禪師、書を善くす、曾て勅賜萬年崇福禪寺の扁額を書す、湛慧是を掲げて寺號とす、寛元元年、後嵯峨天皇、勅して官寺とし給ひ、西都法窟の四大字の勅額を賜ふ、當時は堂塔頗る壯麗にして、八景等も境内にありしといふ、天正十四年七月、岩屋落城（別項に詳かなり）の時、回錄に罹り、寺院坊舍其他、龜山天皇、二條天皇、花園天皇の宸筆勅額綸旨等皆燒土となれり、后慶長五年、大德寺春屋國師、此寺再興のことを、國守黑田長政に請ふ、即千代松原に巨刹を造營し、寺號を移して菩提寺とす、今此址には勝禪寺と云ふ一小庵殘れり、

觀世音寺

太宰府を趾る、西方五六丁、水城村大字觀世音寺にあり、天台宗山門派に屬し、清水山普門院と號す、往昔は鎮西第一の巨刹にして、四十九の末院ありしと、源氏物語玉葛の卷に「大貳の御館の上の、清水の御寺の觀世音に參り給ひさとあり、其他寺領造營の事等、續日本紀、延喜式、百練抄、萬葉集等に著し、

當寺は天智天皇、其御母、齊明天皇、筑紫朝倉宮に於て崩じましく
ければ、御菩提の爲め建立し給へる、いとも尊き聖刹なり、其堂宇
の壯大なりしこと、帝王七代年歴七十餘年にして落成せしを以て知
らるべし、康平二年五月十一日、堂宇廻廊等悉く燒失す、治歴二年
十一月廿一日再建あり、然れど以前の十分の一にも及ばず、現今の
堂宇は、元祿年間、國主光之の建立なり、本尊如意輪觀世音は天智
天皇の御願、東の脇立十一面觀世音は持統天皇の御願、西の脇立不
空絹索觀世音は天武天皇の御願にして、彫刻巧妙古色掬すべし、其
他阿彌陀佛は、保安年中、太宰大貳長實の寄進、馬頭觀世音は大治
年中、太宰大貳經忠の寄進、十一面觀世音は、延保年中觀音寺別當
維寛の寄進なり、此外古佛古器いと多し、寺寶として小野道風の書
ける扁額、小松重盛の寄進せる唐鏡、及假面等あり、菅公の觀音寺
唯聽三鐘聲一と詠じ給ひし古鐘も、昔ながらに響けり、

言の葉に、聞き傳えにし、古寺の昔戀しき、鐘の音かな、

千家尊福

戒壇院

本尊は釋迦佛にして、臨濟宗なり、昔時は觀世音寺四十九院の一な
りしと、天平勝寶六年四月八日、唐鑒眞和尚此院に於て始めて受戒
を行ふ、是我國受戒の濫觴なり、
古へ我國にて、受戒を行ひし處、三所あり、則大和東大寺、下野藥
師寺、及此院なり、斯る尊とき靈場なれば、觀音寺の末院悉く斷滅
せしも、此院のみは今に殘れるなり

山王社

觀世音寺の後の小山にあり是往昔觀音寺の鎮守の社なり今此寺に藏

せる假面の裏書にも觀世音寺日吉御神とあり天正十五年六月六日、豐臣秀吉島津氏を征服し、太宰府神社に參せし時、此社の傍に假殿を搆へ居陣しぬ、

僧玄肪墓

觀世音寺の傍らなる田畔にあり、續日本紀に、天平十七年十一月、玄肪法師を遣はして、筑紫觀世音寺を造るとあり、又元亨釋書に、天平十八年六月、筑紫觀音寺成、玄肪導師となり輿に乘りて殿に入る、忽ち空中より玄肪を提捉す、玄肪騰りて見えず、後日玄肪の頭興福寺唐院に落つ、蓋藤原廣嗣の靈、之を爲すなりとあり、按ふに玄肪は、聖武天皇の御宇、内道場に入り、光明皇后に近侍す、少貳藤原廣嗣之を除かんと欲し、天平十二年太宰府に據り、兵を擧げしが、軍敗れて誅せらる、其后玄肪勅を奉じ、觀世音寺に來りしを以

博士を置かれしものなれば、此院の尙ふるく、設けられしことを知るべし、江家次第に、吉備大臣入唐、弘文館の畫像を持ち、太宰府學業院に安置すとあり、延喜式に、太宰府は先聖先師閔子騫三座とあり、今太宰府神社所藏の、三聖銅像は是なるべし、稱德天皇、神護景雲三年、太宰府より白さく、此府人物殷富にして、天下の一都會なり、弟子の輩、學者稍多くして、府庫唯五經のみ有て未だ三史あらず、伏て乞ふ、例代の諸史、各一部を下し給へと、よりて天皇より、三史、三國志、晉書各一部を賜はりしこと、續日本紀に記せり、延喜式に、太宰府大學に准ずとあり、然らば則筑前國學とは異なりて、特別に大學に准して、此院を設置せられしを知る可し、

太宰府址

觀世音寺の西方を趾る三四丁、築山と稱する小丘の西の田圃中、巨

て、廣嗣の餘黨、之を殺しゝものなるべし、

太宰少貳武藤資頼墓

觀世音寺の北の山中にあり、塔婆の周りに、佛像を彫めり、資頼は源頼朝に從ふて武功あり、よりて太宰少貳となり、子孫連綿十一世其職を奉せり、法名を安養院殿覺佛禪定門と號す、是生前觀世音寺の末院、安養院を建立せしを以てなり、此墓の在る所、則此安養院の址なり、

學業院址

觀世音寺の西方、人家の傍近にあり、天平勝寶年間、吉備公太宰大貳たりし時、此院を建てしと、左れども今に大學寮博士太宰府博士共に一人にて、經業を教授すとあり、今は吉備公以前の敕撰にて、

大の殘礎に圍まれて、有栖川宮殿下の篆額に福岡縣令渡邊清の撰文を刻める碑表あり、其傍に御笠郡乙金村大保正高原美德の建てし碑表ありて舊蹟歴然たり、

夫れ此府は、往古九州二島の政治を總轄し、外寇防禦の重鎮たり、而して其始めて國史に視えたるは、推古天皇の十七年なり、然らは必ず其以前已に、此府の設置せられたりしを知るべし、按ふに神功皇后、一舉三韓を服し、凱旋の時、大矢田宿禰を以て、將軍とし內官家を置かせ給ふ、所謂日本府なり后儒佛の二教渡來せしより、上古以來進取勇敢の風習悉く去つて、上下文弱に流る、斯を以て三韓屢反するも、遂に之れを征服する能はざるに至り、日本府も三韓に置く能はずして、內地に置くの已むを得ざるに至れり、太宰府の源實に斯に發せり、嗚呼國民元氣の、國家の盛衰に及ぼす影響、洵に般鑑みる可きなり、則知る、日本府の進略的にして、太宰府の退守

的なりしかを、

齊明天皇の御宇、新羅高麗と兵を合せ唐に通じて、百濟を攻む、天皇即皇太子（天智天皇）と共に筑紫朝倉宮に幸す、會々天皇崩ず、太子素服軍政を執り、三萬の兵を發して、百濟を救はしめ給ひしが、我軍利あらず、斯に於て神功以來我國に屬せし三韓は、反つて唐に通じて、我國を襲はんとするの、形勢ありしかば、天智天皇即ち大城椽の二城及水城を築き、關塞、斥候、驛傳を置き、防人、烽火、警虞を儼にし、紀綱を振肅し、軍粮を蓄へ、以て外寇に備へしめ給ふ、太宰府の隆盛なる、蓋し是れより始まれるものゝ如し、

而して仝天皇の朝には、都督府と稱し、聖武天皇の朝には鎮西府と稱し、清和天皇の朝には外朝と號す、皆是太宰府を謂ふなり、官人は五年にして交迭す、長官を太宰帥と云ふ、有品親王を以て之れに任ず、次官を權帥と云ふ、納言以上の人を以て之れに任ず、而して

少貳氏と稱せり、元弘建武の亂起るに至りて漸く衰え、永正年中少貳政資戰死するに及んで遂に滅ぶ、始の資頼少貳となりしより十一世、大凡三百年間其職を奉せり、

應永四年大内義弘、大宰大貳に任せられ、守護代を博多に派して、政治を行ひしが、其子義隆天文二十二年死するに至りて、太宰の官斷滅するに至りぬ、始め此府の正史に顯はれしより、此に至る殆んど一千年間、西海の重鎮たりしなり、

然るに此府廳の廢滅せしことは正史に視へずと雖壽永二年安德天皇西遷し給ひし時は存在せしや明らかなり今も里人は此址を内裏の址と稱し、紫震殿と稱する田字もあり、猿澤の池の址もあるは此故なるべし、降りて弘安の役までは、此府は實に我軍の根據地なりしなり、而して元弘の亂起るに至り、少貳貞經内山城を築き、政務を執りしより、此府遂に廢滅するに至りぬ、文明年間に誌せる宗祇法師

帥は遠官と稱して、京師にありて政務を辨せり、其他大貳、少貳、大典、小典、大監、小監、判事、博士、醫師、陰陽師、主船、主城、弩師、學授、大唐通事、新羅譯語等の官、枚擧に遑あらず、

聖武天皇天平十二年、太宰少貳藤原廣嗣叛し、官軍と戰ひ敗れて誅に伏す、此亂太宰府官屬多く廣嗣に黨せり、朱雀天皇天慶三年、藤原純友叛し、太宰府累代の財物を奪ひ、火を放つて悉く府を燒く、后官舍等再建せられしも、前九年後三年の役起り、東方多事にして西陲漸く無事なりしを以て、權帥も赴任することなく、大貳をして府務を執らしめたりしが、崇德天皇の時、平清盛大貳たりし後は、大貳も亦赴任することなく、少貳原田種直府務を掌握せり、源頼朝、天下兵馬の權を掌どる至り、文治元年、土肥實平を派して府務を總理せしむ、仝二年、天野遠景之れに代りしが、建久七年武藤資頼少貳に任じ、鎮西守護職となり、其子孫世々職を奉ず、故に

の紀行には、其荒蕪の狀歴々視るが如し、今此址を視るに太宰府より水城に通ずる道にそひて、田圃道より一段低くして、東西に長きは、是池惶の址なり、此田間の小路を北方に進み行けば、東西八間、南北六間、礎石十個あり、是南大門の址なり、尙北方へ行けば、一段高き蒿原あり、東西十四間、南北六間巨大の礎石四十一あり、是則太宰府の正廳、都府樓の址なり、此近傍の田野は、總べて殘礎碁布せし由なれども、耕耘の妨あるを以て、悉く採取せしなり、文政三年の頃迄は、また三百三十六個を存せしといふ、又此田間に瓦片の散布せるあり、都府樓瓦と稱する是なり、菅公の詩に、都府樓纔見瓦色の句あるは、夙に世の知るところなり、

漏刻樓の址は、築山と稱する小丘の上にあり、昔は辰山と云ひしを訛りたるものなりと、續日本記に、太宰陸奥同じく不慮を警む、而して太宰には既に漏刻あり、此國其器なしとあり、延喜式に、太宰

陸奥、漏刻守辰丁各六人とあり、

都府樓の西方なる岡を、藏司の址といふ、是太宰府の倉庫なり、延喜式に凡そ諸國貢庸する者、西海道は太宰府に納むとあり、其宏大なりしを知るべし、又其西に匠司の址あり、續記に桓武天皇延曆九年太宰府に命じ、鐵冑二千九百枚を造らしめらるとあり、又仁明天皇承和二年三月、太宰府に命じて、甲冑及袴を造らしめらる等あれば、斯るものを製造せし處なりしや明なり、又其西に國の牢と云ふ處あり、是獄舍の址なり、續記に藤原廣嗣が謀叛の與黨を搜出して太宰府の獄に囚ふ由見也、

草場船山

茫々麻麥滿二平疇一、何處昔年都府樓、偶伴二田夫一拾二遺瓦一、堪思菅相謫居秋、

大城谷桂樵

鐘鳴觀音寺。瓦遺都府樓、豈無二懷古情一。邈矣千餘年。自レ入二菅公旬一。響徹六十州。絶念豐碑建。吊古志士留。疇昔鎭西地。爲二國之咽喉一。秉レ政出二軍陣一。百萬靡二元仇一。追慕前代盛。荷祭謫居愁。嗚呼古鐘與二片瓦一。世々閲二沈浮一。

西三條季知

遠の世の、遠の朝廷と、思ひしに、殘れば殘る、址を見るかな、

東久世通禧

みる〳〵と、昔の色の、替らずで、玉にしもこそ、かへ勝りけれ、

千家尊福

鏡には、見えぬ昔の、面影も、向へばうかぶ、古瓦かな、

太宰府址碑

壞之廣者。程之遠者。管鎭不レ可レ不レ重也。筑紫爲レ壞最廣。其距二帝

都不爲不遠。況新羅百濟等之朝貢於我者。皆湊於此。故太宰帥古以親王任之。其爲重鎭可知矣。國朝置府蓋有上古而太宰府之名始見推古紀。至天智朝曰都督府。聖武朝曰鎭西府、清和朝曰外。朝皆太宰府也。延喜中菅原道眞貶權帥。其詩有都府樓纔見瓦色之句。指府樓也。壽永年中安德帝西狩駐蹕、當時尙存舊制云。既而王綱解紐。源頼朝以天野遠景爲鎭西奉行。建久中武藤資頼任太宰少貳。子孫襲職。府制又大變。降至足利氏之衰。府廳遂廢矣。今礎石存麗間者二百有餘。當時曹局所在雖不可復辨。府門府樓其蹟可驗。傍近傳爲藏司遺址。亦存礎石一百三十有餘。學業院水城菅關亦煙滅。僅知其處耳。清承之令于本縣六年於此矣。每來邀鼓嶺之麓想見其雄圖偉畧。未嘗無今昔之感也。而里民或墾爲畦畝。殘礎多埋沒。天明中國主黑田齊隆令禁之。今茲庚辰御笠郡之諸子慨其終湮滅。請建碑以紀之。清嘉其舉損貲助之。乃銘曰

官寮台肅　制度台嚴　九洲維宰
三韓維盛　邊戍有備　梓弓爲林
昇降有序　水漏報音　悠々風雨
府樓堙滅　綿々星霜　礎石散刊
思川水枯　皷峯霜結　千載之下
凄風寒月

陸軍大將兼左大臣議定官二品大勳位熾仁親王篆額
福岡縣令從五位勳四等　渡邊清撰
正五位　日下部東作書

明治十二年八月建

大城山

觀世音寺の北方に、屏風の如く空を横ぎれる山あり、是を大城山と云ふ、天智天皇四年八月、百濟の人、憶禮等をして此山に城を築き、太宰府の鎮城とし給ふ、是我國築城の濫觴なり、故に大城山と稱す、此山古へは大野郷に屬せしを以て、大野山とも稱し、又四天王寺創立せられしより、四天王寺山とも稱せり、西北の高峰を皷が峰と云ふ、大城ありし時、皷吹を調練せしを以てなり、又火の尾といふ峰あり、是烽火臺の址なり、又主城と云ふ所あり、是主城官の居りし處なり、

萬葉集　阪上朗女

今もかも、大城山の、時鳥、なきよぎむらん、我なけれども、

仝　山上憶良

大野山、霧立渡る、わかなけく、おきその風に、霧たちわたる、

仝　作者不詳

いちじるく、時雨の雨は、降らなくに、大城山は、色づきにけり、

千家尊福

礎の、殘らざりせば、山の名の、大城の址をいかで知らまし、

四天王寺址

大城山中にあり、圓滿山と號せしと、其創立の時と斷滅の時とを知らず、夫れ城中に、四天王を祀る所以は、唐玄宗皇帝の時、西蕃來りて安西に寇す、皇帝三藏法師に詔して祈念せしめ給ひしかば、四天王現形して官軍を救ひ賊を滅ぼしたり、因て皇帝諸道に詔して、城の西北に四天王を奉祀せしめらるゝ由、僧史略にあり、玄宗皇帝は我國聖武天皇の御時なれば、此頃よりや我國にも傳はりしなるべ

し、

日本後紀に延暦三十年、太宰府大野山四天王法を行ふ停む云々、又大同二年十二月太宰府言す、大野城鼓峯に於て、堂宇を建立し、四天王像を安置す、然れども制旨により、其像及法物等、筑前國金光明寺に遷置す云々又弘仁二年二月、太宰府皷峯四天王寺に於て、釋迦佛の像を造るとあり、又文德實錄に、仁壽三年五月太宰府に詔し、四王院に於て大般若經を讀ましめらるとあり、當時聖刹なりしを想ふべし、

岩屋城址

大城山中にあり、永錄二年高橋鑑種之れを築きぬ、高橋氏は漢高祖の苗裔、我國に歸化せしものにして、原田秋月江上と仝族なり、筑後國高橋の里に住す、故に高橋氏と稱す、世々豐後大友氏の幕下たり、永祿十年高橋鑑種大友氏に背きしを以て、封を移され、大友氏の叔臣吉弘鑑理の二男、鎮理を以て、高橋氏の嗣とす、鎮理后薙髮して紹運と稱す、時に大友宗麟、驕暴度なし、幕下の諸族悉く離反し、國勢日に蹙まる、紹運、立花城主道雪と共に、毅然として忠節を二にせず、大小數百戰、堅を挫き鋭を破り、以て宗家の藩屏たり、天正十四年島津義弘、兵五萬を以て來り圍む、紹運死士八百を以て、孤城を守ること十有四日、敵軍を斃すこと五千餘人、城陷り遂に自殺す、翌年豐臣秀吉九州を平定し、紹運の戰死を烈とし、長子（長子は立花道雪の養子となれり是當時驍名天下に蟲きたる左近將監宗茂なり）を柳河に、季子を三池に封す、

紹運の墓は、山腹一孤松の下にあり、碑表は寛政六年三池侯立花種周の建つる處にして、碑文は肥後の儒臣藪孤山の撰なり、嗚呼英雄骨朽ちて、青苔荒墟を封ずること三百餘年、香煙空しく絶えて、只松風の寥々として往時を談ずるを聞くのみ、太宰府に菅公の忠魂を

吊ひ、水城に死士の英靈を慰めん者は、又宜しく杖を此城址に曳け、紹運は實に日本武士の儀表にあらずや、

月形焦巣

吁何思義共勞休、精鋭公軍以死酬、宛似阻飢巡養馬、寧同既濟結沈舟、故關燐走水城雨、荒壘狐嗥岩屋秋、碑字縱遭荆棘沒、勳名長傍日星流、

神無月の果る頃、高橋紹運が墓に詣りて、

三條實美

身にしみて悽ましき迄武夫の心のはてを聞くわらしかな
花すゝき君が手向に手折られてさゝぐる袖も露に濡れつゝ

高橋紹運公碑

大友氏覇西海也十餘世。當其季世。天下大亂。豐南有薩。北有藝。西有肥。三國爭雄。子才無虛歲。加以大友氏不君。撫御失道。諸將內叛。反覆無常。其忠誠智勇可以爲腹心干城。唯戶次道雪高橋紹運二公。二公皆出鎮于筑。道雪公城立花。紹運公城岩屋。以備西北。既西北之警少弛。薩益强大。大友氏國勢日蹙。危在旦夕。乃東請援於大阪。關白許之。師出有日矣。天正十四年秋七月薩大軍長驅入筑。所過城邑皆降。其不降者唯岩屋寶滿立花耳。先是道雪公卒無子。請紹運公之長公子爲嗣。紹運公又使季公子別守寶滿。於是公父子兄弟三城鼎立。而岩屋當其衝。薩以兵五万人圍之數重。遣使威公以危言。又誘公以甘言。公皆卻之。於是牌礮並進。晝夜攻擊。城中之兵不滿八百。公獨以忠義恩信。得其死力。遂能相待十有四日。而城陷公沒。年三十九。無一士苟免者。而薩軍死亡五千餘人。故薩雖得勝軍亦罷。又聞大阪之先軍已至柳浦。遂不能圍立花而去。明

年關白伐薩。請服。而大友氏亦竟不滅矣。初岩屋之未圍也長公子馳使諫公曰。岩屋卑矣。不如退守寶滿。公曰苟論也。且吾國戚臣。死固吾分。我以死守。城雖不堅可支十餘日。兵雖不衆所殺亦過當。彼師已老。其攻立花必緩。夫立花名城也。城堅攻緩。可支二十日。過敵前後三十日。則大阪之援必至。我父子可以報國矣。果如公所斷。關白嘉公忠烈殉國。乃封長公子於柳河。封季公於三池。皆立爲諸侯。世々勿絕。以長公子出嗣戶次氏。季公子得承公後。公沒後二百余年。今三池侯將追建碑於其戰沒之墟。以耀先烈。徵文外臣藪懋。恭惟公精忠貫日月。大名垂宇宙。固無待區々不典之文。然今侯追遠之孝。報本之典。不可以已也。故謹略述殉國一節。併之詩。以授使者。他則不逮甄錄云。銘曰。

公守巖屋　南寇如雲　一身餓敵

宗國以孝　孔曰成仁　孟曰取義
人之所難　公則易々　公不求爾
第士奕世　公不求名　莫之與大
永言孝思　今侯之賢　追錫貞石
於萬斯年

寛政六年甲寅秋七月二十七日

熊本府學祭酒藪懋　謹撰

善勝寺址

都府樓の址の北なる里を坂本といふ、此處より大城山に登る山路を車坂といふ、太宰府盛大なりし頃、府官僧侶等車に乘りて此處まで往來せしにや、此邊に善勝寺と稱する寺址あり、是四天王寺の座主寺なりしなり、此を頓御殿と稱す、壽永二年八月十七日、安德天皇

平家の一門と共に、太宰府に着かせ給ひ、此寺に駐蹕し給ふ、故に頓御殿といふとぞ、按ふに太宰府は官舍にて、宿泊し給ふべきにあらざれば、此寺に渡らせ給ひしなるべし、

刈萱關址

天智天皇の御宇、太宰府警固の爲め、置かれし關なり、太宰府の古址を距る西方三四丁、今は單に關屋と稱し、田甫中に僅かに其址を遺せり、

刈萱關外雨漫々、濕氣吹衣夏尚寒、忽喜天南呈霽色、
高良依約見峰巒、　梁川星巖

麗迤山勢漸彎環、紅樹人家暮靄間、行客未尋都督府、
長三州

秋風凄絶古萱關、
新古今集　菅家

刈萱の關守とのみ見えつるは人もゆるさぬ道邊なりけり
玉房　同

思ひきや心つくしの果に來て宿りを今は刈かやの關
宗祇法師

數ならぬ身をもいかにと言問はゞ如何なる名をや刈萱の關
三條實美

風吹けばしのに亂れてかるかやの關屋にかゝる夕立の雨

國分寺

刈萱關址の西北、四五町余の處にありて、眞言宗に屬す、國分寺とは、國分僧寺と國分尼寺との稱にして、僧寺を金光明四天王護國寺

と云ひ、尼寺を法華滅罪寺と云ふ、聖武天皇天平十二年敕して、六十六個國毎に國分寺を建しめ給ひしこと、續日本記に見えたり、今に僧寺の址に、聊かなる堂宇殘りて、藥師如來を奉置せり、

水城址

國分寺の西方、水城村大字水城にあり、日本紀に天智天皇三年、筑紫に大堤を築きて、水を貯ふ名付けて水城と云ふと記せり、是則外寇防禦の要害なり、後六百餘年を經て、大に其効を顯はせり、元寇の役、賊軍博多を破りて、直ちに太宰府を犯さんとす、我兵水城を死守し、從横奮戰大に是を敗りしかば、敵軍上陸する能はず、偶々颶風大に起り、海水簸蕩し、賊艦悉く覆沒しぬ、あゝ何等の快事ぞや、

今其址を視るに、東の殘堤長百九十二間、西の殘堤長二百八十六間、

東西の間絶えて無き處百三十間、高さ五間、根盤三十九間、馬踏三間あり、何れの時よりか、堤内は田甫と變じて水を貯へず、殘堤より今に往々埋木を掘出すことあり、千年木と稱するは是なり、此堤防の東の山際に、水城關址あり、其關門の礎石とて今も縣道畔にあり、

萬葉集

大伴旅人

大丈夫と思へる我や水莖の水城の上に涙ぬぐはん

大貳高遠

夫木集

岩垣の水城の關にむれ迎ふうちの心も知らぬ諸人

千家尊福

寇もりし水城の址に立つものは稻葉の波と案山子なりけり

衣掛天神

水城關址の近附に、衣掛天神と稱する小祠あり、傳え云ふ延喜元年、菅公左遷せられ給ひて、博多より太宰府へ赴むかせ給ひし時、水城の關に御輿を止めさせ給ふ、關守花田某恭しく迎へ奉る、公衣服を改めて太宰府へ到らんとて、御衣を脱ぎて傍らなる石に掛けさせ給ひ、門司花田某へ、

引き結ぶはな田の帶のとけよかし今日かるかやのつかねをにせん

と一首の和歌を詠じて、之れを與へ給ふ、此歌久しく花田家に藏めたりしが、何時頃よりか無くなりて、歌のみ云ひ傳えけり、又此家に水城關門に掲げし鬼瓦を藏す其質堅牢にして鐵の如し世人これを賞觀す、斯くて公は延喜三年薨じ給ひしが、后堀川院の御宇、康和の頃、市川勝重といふ人、石の傍に小祠を建後又其東なる小丘に小祠を建て、衣掛天神と稱し之れを祭りぬ、

榎社

太宰府神社の西南、二十丁餘の處にあり、俗に榎寺と稱す、則菅公の、太宰府へ左遷せられ給ひし時の、配所にして、菅家後草に、都府の南館と、記し給ひしは是なり、日々恩賜を御衣を捧持して、餘香を拜すと、吟じ給ひしも此處なり、夜々月光を眺めて、都の空に澄みぬらんと、詠じ給ひしも此處なり、後一條天皇治安年中都督惟憲卿、懷古の情に堪へず、伽藍一宇を建て、淨明寺といふ、毎年八月二十三日、菅神の御輿、此處に渡御し給ふ、頓宮は是なり、

例祭年々八月期、簫聲吹送晩風時、神輿去後無人來、
一片斜陽照古祠　吉嗣拜山

三條公手栽松

榎社を距る三町、水城村大字通古賀陶山氏の庭園に在り、こは是れ故三條實美公等の五公卿か慶應年間、長藩より太宰府へ下られし時の紀念樹たり、時に此地に陶山一貫と云へる老醫あり、慷慨交を志士に結ぶ、而して三條公等の五公卿が近く太宰府へ遷座ありしを以て、旅館に至りて拜謁し、公等の病を治するを以て名として左右に侍し、公等も時々翁が草庵を訪はれたり、左れば翁は五公卿と平野西郷等との間に立ちて、窃かに回天の謀略を斡施せしと尠からず、扨て五公卿太宰府の駐座三ヶ年の間に天下の士雲興して、王政維新の機熟し、公等は風雲に際會し、復官歸落の途に就かる、斯る緣故のあるあれば、三條公は其年子の日に、寵門山に登り手ずから根こぎし給へる小松の、盆栽ありけるに、左の二首の詠歌を添へ、從臣に齎らして、翁が庭前に徙し植へしめ賜ひしなり、今は青々緣を暢し、殆んど重蓋の如く生茂れり、翁が孫なる松庵其傍に紀念碑を建て公の詠歌を彫り、裏に江島茂逸の撰文を刻せり、尚翁が家には、至尊の什物、公等及勤王志士の書簽許多あり

陶山一貫翁が庭前に紀念として小松を植へて　實美

植置し手馴の松の老さまを生きてふたゝび見むよしもかな

かけ高く枝も榮へて此松のあるじはともに花かつらせん

幸橋

榎社の北なる小川に架したる石橋なり、天正七年秋月種實筑紫廣門等、岩屋城を攻めけるとき、高橋氏の士關内記が奮戰せし所なり、

懷中　大貳高遠

頼もしき名にもあるかな道行かば先づ幸の橋を渡らん

隈麿の墓

榎社の東南、水城村大字片野字隈の前の圃中にあり、野石高三尺余、側らに老ひたる梅樹あり是を隈麿の墓と云ひ傳ふ、隈麿は菅公の末男にして、年少なれば、公に隨行するを許されしなり、謫居中、公の心を慰藉するは、只小男小女あるのみ、菅家後草に、慰小男小女の詩あり、小男とは則隈麿のことなり、然るに延喜二年八月配所に夭死せらる、公甚之を哀み秋夜の詩を賦せられしことあり

高橋紹運首塚

片野の東南なる圃中に五輪の石塔あり、是般若寺と稱する寺址なり、其東の丘上に、高五尺三寸從一丈六尺横九尺八寸ある古墳あり、是紹運の首塚なり、島津氏大舉岩屋城を攻めし時、此地を本陣とせり、

筑陽記に曰く「高橋紹運忠戰義死」す、遺言に依て、頸を敵軍に送る、敵將實檢の後、其忠義勇悍を感嘆し、秋月禪僧茂林和尚に請ふて、懇切に之を吊ひしとあり、其偈に曰く

一將功名冠二九州一　戰場血入染二川流一　殺レ人刀矣活レ人劍
月白風高岩屋秋

白川

榎社の西南にあり、名高き歌人、檜垣嫗の住みたる所は、垣の内と稱して、榎社と片野との間にあり、此嫗の遺址肥后の白川の邊りにもあり中島廣足翁は、檜垣嫗家集增補を著して、此嫗が白川を詠せしは、肥后なる方、正しき由、論せられたれど、此歌の端書を見るに、後選には、「筑紫の白川と云ふ處に、住み侍りけるに、大貳藤原範朝臣のまかり渡り、叙に水たべんとて、打よりて乞ひ侍りければ、

水を以て歌を詠み侍りける」とあり大和物語には「純友が追討の使に、太武小野好古下りて、檜垣の媼が家のありし邊りを尋ね、甚しう哀れがりて、呼はすれど耻て來で、歌を詠み侍りける」とあり大式の住みし所とあれば、太宰府附近なるべきは勿論なり、又彼藤原純友は四國にて反旗を擧げ、軍敗れて太宰府に走り、府を燒き吏民を殺す、好古進んで之れを攻む、純友復伊豫に走り、遂に誅に伏せり、左れば好古が檜垣媼に會ひしも此時なるべければ、筑前なるを是とすべきなり、

後撰集　檜垣媼

年ふれば我黑髪も白川の水はぐむまで老にける哉

家集　清原元輔

戀なれど底にもすまぬ白川は水にごれりとおもはゆる哉

夫木集　詠者不詳

年ふれば水だにすまじ白川の月のとまりと成にける哉

下濁る人の心にそゝがばやみも潔よき白川の水　千家尊福

漆川

二日市の北通古賀の坤の方四五町斗りに在り其川の邊の田の字をも漆川と云ふ八雲御抄に筑前に在りと記せり

拾遺集　よみ人しらず

名にはいへとくろくも見へずうるし川さすがにわたる水はぬるめり

紫

二日市の隣邑なり、往古外國より、始めて紫草を此地に植ゑけるより、今は地名となれるなり、

筑紫にも紫生る野邊はあれどなき名悲び人ぞ聞えぬ　菅家

天拜山

太宰府神社の西南なる天頂に、一大孤松の天に朝せるあり、是菅公の遺蹟を以て、有名なる天拜山にして、一名を天判山と云ふ、山上に岩あり、天拜岩と稱す、此岩上にて、公天を拜し給ひしと、昔時は只此岩を神靈として拜せしが、何時の頃よりか、小社を建てゝ齋き祭れり、毎年八月廿三日、太宰府なる菅公の神輿、榎社の頓宮に渡らせ給ふ時は、此山上にて、曉天より篝火をたくを例とせり、近頃衆議院議員久米民之助、碑表を建て菅公之徳與二日月一爭レ光と、題せり

西三條季知

今日こゝに身は下ながらそのかみの址をとふてぞ畏こかりけれ

此神の操をみねの一つ松世にたぐひなく誰れか仰がぬ　千家尊福

天拜山下宮

天拜山の麓にあり、御自作天神、新天神又は拜殿と云ふ、御神體は、延喜中菅公武藏寺に入り給ひて、自ら其像を彫み給ひし由、該寺縁起に詳かなり、後武藏寺の傍らに小祠を建て、其像を奉祀す、里人呼んで森天神と云ふ（今は此址民家となれり然れども尚森天神と呼べり）天正十四年島津氏岩屋城を攻めける時、其將、高城宮内、武藏寺の上なる堂山城を圍み火を放ちぬ、餘燼散亂して、武藏寺を始め、此社も烏有に歸す、此時尊像を出し奉るに遑あらず、己むを得ず、御首のみ出し奉れり、后御笠郡の大司、立花增弘、佛師に命じて之を補脩せしめ、元祿五年現今の處に新に社を建てゝ奉祀し、天拜山に登る能はざる老幼の便とす、

新天神、拜殿等の稱ある此故なり、社司を圓智坊と云ふ、其宅址社前にあり、明治二十六年臨時全國寶物取調局より、此尊像へ對し鑑査狀を下付せられたり、

龍王瀑布

天拜山下宮の祠前にあり、清淨瀑布、紫藤瀑布とも云ふ、延喜中、菅公此瀑布にて、垢離し給ひ、天拜山に登り給ふ、其時此瀑布の形勢を漢土の龍門水に比して、龍音水と名付け給ふと、武藏寺緣起に記せり、瀑布の邊に高き石あり御衣掛石といふ、是公衣を脫ぎて掛け給ひしものなり、又其傍に古き石塔あり、詩を刻して曰く、

天拜峰頭仰彼蒼、願心成滿放威光、御衣薰石變爲塔、
五百年來流水香、　正平二十年二月二十五日、

願主大僧都信聰謹題、

巍峨菅廟鎭靑山、松自森々雲自閑、一濺洗冤小飛瀑、
爲公流得響人間、

吉嗣拜山

相生松

龍王瀑布の傍にあり、其由來を尋ぬるに、天拜山の半腹に、陸松一株あり、地を出ること一尺余にして、双股となり、相對して高數丈あり、里人名付て二本松といふ、文政五年大雪數日一股遂に壓折す、依つて領主立花氏是を荒穗神社（天拜山の中腹にあり）の祠官、松崎久滿に與ふ、久滿人をして枝葉を採らしめ、其幹を村民に與ふ、村民に又次と云ふ者あり、之を伐採せんとす、松樹已に枯槁すること久し、忽ち鱗殼の間に、二芽を生ず、長ずること各五寸余、又次大に驚き熟視するに、雄雌相對せり、益以て奇とし、鋸して一段とし、背負ひて山

を下り、天拜山下宮の祠官、圓智坊快憐に示す、快憐感賞し求めて止まず、又次是を許す、快憐即此地に植ゆ、江湖相傳えて奇端とし、近邑の里正等相謀り、畫人秋圃をして之を畫かしめ、藩主黑田侯に呈す、侯も亦之を奇とし畫工をして再び寫さしめ、珍藏せらるゝと、今は年を經ぬること八十年、相生の綠いよ〳〵深く、千歲を爭へり、世人仰ぎて神木と稱するも、故なしと謂ふ可かへす、

武藏寺

天拜山下宮の傍らにあり、天台宗にして椿花山成就院と號す、又温泉道場とも稱す、其緣起に曰く、天智天皇の御頃、此里に此國の國造、登羅麻呂といふ人あり、或時天拜山の山奥より、夜々怪しき光出づ、或夜登羅麻呂之を射たりしに光は忽ち消えぬ、登羅麻呂此夜の夢に、形相いと怪しき人、來りて曰く、我藥師十二神將の內、摩

虎羅大將なり、此夜汝が射るところの光は、則藥師如來の尊靈を寓せる靈木の光明なり、其放ちし矢靈木に中りてあり、汝是を以て藥師如來の御像を彫み奉るべしと、登羅麻呂即翌日之を尋ね行きしに、十二枝立榮えたる大なる椿樹に、矢中りてぞありける、登羅麻呂即ち當時の名僧、釋祚蓮を都より招きて、此樹を以て、藥師二菩薩十二神將を彫み、寺を建てゝ武藏寺と稱す、子院十二は如來十二の本願を表はして之を建立す、天武天皇是を聞かせ給ひ靈佛出現し給ふ、稀代の地なるを以て、敕願所とし給ふ、後數百年は太宰府盛大なりしを以て、當寺も頗繁盛なりしと見も、彼大納言源隆國の著なる、宇治拾遺物語に、筑紫武藏寺とあり、又藤原周光大江隆兼も當寺に賽せしと見も、其詩本朝無題詩集にあり、

後建武の亂に、少貳氏、菊池氏の兵と戰ひし時、兵火に罹りしかば、漸く再建しけるが、天正十四年島津氏岩屋城を攻めけるとき、復兵

火に罹りしを以て、今は僅に本堂一宇坊舎一宇を存するのみ、詣で視よ、十二子院の址、十王堂、石見堂等の址、歴々徴すべく、古道青苔滑らかに、嵐にまがふ木魚の聲の、絶え〳〵に聞ゆるも、哀れなり、

温泉道場言志　大江隆兼

云名云利兩忘身、日々行々△往臻、昨翫水城原上月、
今憐湯寺洞中春、呼朋好鳥意同我、驚望新花榮似人、
尋地適傳前蹟日、憶郷暫△外朝塵、琴詩酒處雖成戯、
佛法僧間遂仰眞、累葉文華相畜得、海西辨置是何因、

詣武藏寺　藤原周光

聞道仁祠索稱名、攀躋養志自忘形、幽溪松瘦枯鱗老、
行道苔穿舊癖青、罷夢嶺嵐來梵宇、俟齊林鳥狎禪庭、
已將香花結緣竟、遮莫浮生及暮齡、

藤波の花になれつゝ宮人の昔の色に袖をそめけり　東久世通禧

武藏温泉

二日市驛の西南僅に三町餘、二日市町大字武藏にあり、俗に湯町と稱す、古へは湯原温泉、西府温泉なゞ云へり、大宰府水城等、碁布せる名所舊蹟を探り、天拜山に登りて菅公の聖址を拜し、此温泉に一浴し、樓に登らば、忽ち其勞を一洗し、其快哉實に言ふ可からざらん、

武藏寺を開基せし登羅麻呂（武藏寺の項を參照せよ）に一女ありしが、惡病流行して、此女も病に罹りければ、武藏寺に詣でゝ、冥救を祈る、或時藥師出現し告げて曰く、此處より東に方り、白氣の立覆へる處あらん、其處を墾ち視よ、必ず温泉あらん、是に浴せしめとありければ、此處

に始めて温泉を發見し、病兒は忽ち全快せしと、時に白雉四年なり、是れより病者遠近より來りて、入浴するもの甚多く、畏こくも齊明天皇も、筑紫朝倉宮より鳳輦を枉げ入浴し給ひしと、

此時に當りて、太宰府は、文武の官吏赴任し、西海の政務を統管し、糧を蓄へ、兵を練り、外寇防禦の重鎮たりしかば（紀日本紀に此府人物殷富にして天下の一都會なりとあるを併せ考ふべし）此温泉も、實に前後未曾有の殷賑を極めたり、竹取物語に「車持の皇子は、心たばかりある人にて、公には筑紫國に、湯あみにまからんと暇申して」とあるは此温泉を指せるなり、又古今和歌集第八卷に、源實朝臣が此温泉に赴きけるを、送別しける和歌を載せたり、又本朝文粹第六卷に、宮道朝臣義行の奏狀あり、其中に「之に因て湯療を加へんとし、暫く西海の温泉に向ふ、然して聞く鎮府都督政邪侯多し」と左れば宮道朝臣が、此温泉に入浴せしこと炳かなり、又朝野群載に、此温泉へ向ふ人の事を、太宰府へ告下されし官

符の案あり、如何に當時此温泉の殷賑なりしかを知るに足らん、

文永十一年、及弘安四年に、元の兵、來寇せし時、敵軍は皆矢に毒を塗り、又鐵砲を放ちければ（八幡愚童記を見よ）我軍の負傷甚多かりしが、皆此温泉にて、治療しけり、後兵亂相踵きて起るに至り、此温泉も漸く荒蕪しけるが、元祿の頃此郡の大司、立花增弘、土工を興し、脩築しければ、藩主黑田侯も屢入浴せらる、今御前湯と稱するものは此故なり、

慶應の頃、維新の元勳、三條實美公以下五卿、太宰府へ淹留せられし時、常に入浴せられぬ、明治廿七八年日清戰爭の時は、第六師團陸軍豫備病院支部を此地に設置せられ、幾多忠勇の武夫の病痾及金瘡等を治癒せしめられけり、嗚呼登羅麻呂、藥師の靈夢により、此温泉を發見したりしより、幾許の人をや救ひけん、此温泉に入浴する者は、皆武藏寺に詣で、藥師及登羅麻呂の靈を拜するも、宜な

りと謂ふべし、

浪驛涉旬猶泛然、　愁中有興綴詩篇、　隣船礎日引麻布、
里社祈風供木綿、　夜憶遐鄉綏入夢、　晴望孤島小於拳、
一尋西府温泉地、　治病逗留及兩年、

釋　蓮　禪

清川潺々貫二村流一、中有二温泉療百憂一、奇疾客輕千里路、香喉女
逐少年、遊洗脂妃子未浴、煤石偶皇曾暫留、休道地偏山僻境、
鎭常歌吹湧高樓、

井土周磐

温泉留客夜猶喧、　天拜山前桂月村、　捲枕三更眠不得、
烏啼似訴相公寃

日形質

萬葉集

大伴旅人

湯原に、なく芦鶴は、吾ごとく、妹に戀ふれや、時わかすなく、

散木集　藤原俊頼

わざの事果てゝ、歸りけるに、次田の湯の、向ひにありければ、浴みんとはなけれど、立寄りて足なぞすゝぎける序に、悲しさの、涙と共に、湧きかへる、ゆゝしきことを、浴みしてこそ知れ、

夫木集　藤原行家

時わかぬ、袖の涙を、湯原に、鳴てふ鶴の、音にやくらべん、

三條實美

湯原に、遊ぶあし鶴、ことゝはん、なれこそ知らめ、千代の古へ、

西三條季知

今日こゝに、湯浴みをすれば、むら肝の、心のあかも、殘らざりけり、

大汝、神のみ靈と、湧き出づる、藥のみ湯は、千代にあせめや、

中島廣足

出る湯の、ぬるくなり行く、みながらも、所をかへて、出とてこ思へ、

大熊言道

蘆城驛址

太宰府の東南、御笠村大字阿志岐と稱する處にあり、昔太宰府より都へ通ふ、最始の驛なれば、迎送の歌萬葉集に數多あり、

萬葉集

太宰帥大伴卿、被任大納言、臨二入京之時一、府官人等餞二筑前國蘆城驛家一歌、四首之内、

防人佐大伴四綱

月夜よし、川音清し、いざこゝに、往もゆかぬも、遊びてもかな、

宗祇法師

世の中は、あしき山路に、乘る駒の蹈も定めぬ、世にこそありけれ、

三條實美

玉くしげ、あしきの川邊、朝行けば、心澄み行く、水の音かな、

西三條季知

今日かゝる、宿に來なんと、あしき川、いせきの波の、思ひよりきや、

天山

御笠村大字天山に在り藥塩草には雨山とす古歌多し

詠者不詳

雨山のあたりの雲はうちつけにくもりてのみぞ見へ渡りける

續命院址

二日市を趾る東南二十町許、山口村大字俗明院にあり、往昔九州二島より、太宰府に集るもの、或は疾病に罹り、或は飢餓に依り、死するもの甚多し、依りて太宰大貳小野岑守之を哀み救はんため、續命院一處、檜皮葺屋七宇、鼎一口、懇田百十町を、下附せられんと を請ふ、其文及許可の詔敕、共に續日本紀に見えたり、邈たる上世斯る博愛仁慈の設けありしことこそ尊けれ、されど其址今は訪ふべきものなく、俗明院と書きひがめたるは遺憾の至りなり、

城山

二日市の南方に峙てる高山なり、一名を坊中山と云ふは、山上に四

王院ありて、坊舍等もありしを以てなり、天智天皇の四年、椽城を築かせ給ひし由、日本紀に見ゆ、城山といふも此故なり、三代實錄に、貞觀八年二月十四日太宰府司に命じ、城山四王院にて大般若經を轉讀せしめ給ふとあり、往昔太宰府より、肥前筑後等へ行くには此山を越えしと、

萬葉集

梅の花、散らくはいづく、しかすがに、此城の山に、雪は降りつゝ、

大伴百代

仝

今よりは、城の山道は、さふしけん、我通はんと、思し物を、

葛井連大成

玉吟集

梅の花、咲くや此城の、山屈に、衣匂はし、落るしら波、

藤原家隆

筑紫神社

原田驛の東南にありて、五十猛命を奉祀す、又白日別の神とも云ふ後世相殿に玉依姫命、阪上田村麿を合祀す、延喜式神名帳に筑紫神社一座とあるは是なり、三代實錄に清和天皇貞觀元年、從五位下筑紫神社に、從四位下を授け給ひ、陽成天皇元慶三年に、從四位上を授け給ふ、類聚符鈔に筑前國住吉香椎筑紫竈門箱崎等の官大宮司を以て貫首を爲すとの官符あり釋日本紀に筑後は始め筑前と一國なり、此界の上に猛き神あり、往來の人半は殺さる、筑紫君肥君是を患ひ、今の筑紫君の祖、甕依姫を祝となし、是を祀るとあり、此社、古へは城の山頂上にありしが、筑紫君肥君是を麓に分祀せり、肥國にては荒穗神社と唱へ、筑紫にては本社則是なり、本社は筑紫國魂にして、國號の起源なれば、朝廷よりも尊崇せられ、

社領も多かりしも戰國の時、大宮司筑紫惟門、社領を私有し、武威を近國に振ひしが、其家衰へて、本社も亦敗頽に傾きぬ、現今の神殿は、寛文二年の造營にして、拜殿は正德二年の再建なり、

御笠森

雜餉隈驛を距ること東北十四町許り、縣道の傍近にあり、此森の中に神功皇后を祭れる小祠あり、昔は大木蒼鬱たりしも、今は僅かなる森となれり、日本紀に神功皇后羽白熊鷲を討たんと、香椎宮より松峽宮に移り給ふ時、飄風俄に起りて御笠を吹き落し、此森に掛けし故御笠の森といふ由、日本書紀に詳かなり、

萬葉集　作者不詳

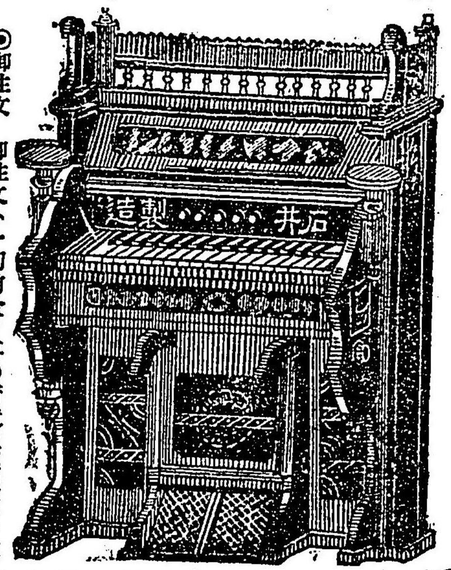
思はぬを、思ふといはゞ、大野なる、御笠の森の、神し知らさん、

御陵

御笠森の北方十余町、大野村大字中字御陵と云ふ處に、寶滿宮の社あり、昔時此隣邑五區の鎮守にして大社なりしも、文錄の頃五所に分祀せしかは、今は僅なる小祠殘れり、天正十七年に誌せる社傳一卷あり、此社殿に本社は玉依姫命の山陵なり、故に地名も御陵といふ、古昔御陵の上に、神廟を建て崇奉せり、景行天皇神功皇后など、西征の時祈願し給ふ、后齊明天皇の勅願により、天智天皇再建し給ひ奉幣使を下され、寶滿宮の勅額を賜ふ、御陵の北なる大嶽塚は文武天皇の御代藤原廣嗣を勅使として、天智天皇御奉納の、御劍を埋め給ふなど誌せり、昔の御社は、今御陵の松と稱ふる樹の、東に在りしと、享和二年今の社の南の山中より、古鏡及太刀等を堀出せり、何れ昔は由緒ありし所なる可けれども、社記の外徵證とす可きものなし

修文館發賣學校用風琴定價表

第一號	三十九鍵	二ストップ付	金拾參圓
第二號	三十九鍵	二重音四ストップ付但一列ハ低音部ヲ除ク	金拾七圓
第三號	四十九鍵	二ストップ付	金貳拾九圓
第四號	四十九鍵	二重音四ストップ付但一列ハ低音部ヲ除ク	金四拾八圓
第五號	四十九鍵	二ストップ付	金參拾四圓
第六號	五十一鍵	二重音四ストップ付但一列ハ低音部ヲ除ク	金四拾四圓
第七號	五十一鍵	二ストップ付	金貳拾九圓
第八號	五十一鍵	二重音四ストップ付但一列ハ低音部ヲ除ク	金五拾六圓
第九號	六十一鍵物	二重音六ストップ付	金六拾六圓
新二號	三十九鍵	二重音三ストップ付但一列ハ低音部ヲ除ク	金貳拾五圓
新三號	四十九鍵	二ストップ付	金參拾六圓
新四號	四十九鍵	二重音三ストップ付但一列ハ低音部ヲ除ク	金四拾參圓
新五號	四十九鍵	二重音四ストップ付	金四拾四圓
新六號	四十九鍵	二重音四ストップ付	金四拾八圓
新七號	五十一鍵	二重音六ストップ付	金六拾四圓
新八號	五十一鍵	二重音六ストップ付	金六拾八圓
新九號	六十一鍵物	二重音九ストップフルイ付	金七拾六圓
別格一號	六十一鍵	三重音八ストップ但一列ハ低音部ヲ除ク	金六拾四圓
別格二號	六十一鍵	三重音九ストップフルイ付但一列ハ低音部ヲ除ク	金九拾六圓
別格三號	六十一鍵	三重音十ストップ付	金百拾四圓
別格四號	六十一鍵	四重音十二ストップ付但一列ハ低音部ヲ除ク	金百貳拾圓



◉御注文　御注文ハ一切前金ノ事○荷造及運送費ハ定價ノ外實費申受候事

◉規定　運送方法ハ御注文ノ際御申込ノ事○細密定價表御入用ノ向ハ郵券封入申込アレ送呈ス

大阪市南區順慶町通三丁目五

修文館

鐵レール

修文館製造

鐵アレー定價表

	代價		代價
一磅（一對二百四十目ニテ）	三十錢	十磅（一貫四百目ニテ）	壹圓十五錢
二磅（一對四百八十目ニテ）	三十五錢	十二磅（一貫六百四十目ニテ）	一圓廿五錢
三磅（一對七百二十目ニテ）	四十錢	十二磅（一貫八百八十目ニテ）	一圓卅五錢
四磅（一對九百六十目ニテ）	五十錢	十三磅（一貫百二十目ニテ）	一圓四十五錢
五磅（一貫二百目ニテ）	六十錢	十四磅（一貫三百六十目ニテ）	一圓五十五錢
六磅（一貫四百四十目ニテ）	七十錢	十五磅（一貫六百目ニテ）	一圓六十五錢
七磅（一貫六百八十目ニテ）	八十五錢		
八磅（一貫九百二十目ニテ）	九十五錢		
九磅（二貫百六十目ニテ）	壹圓〇五錢		

弊店製造の「鉄アレー」は、他店の品よりは原質を撰みそうして格好よく美麗に而かも堅牢に出來て居ります、故に他の粗製品のやうに運送の途中で折れる樣な事はありません其の上直段が廉ひから世の休育を重んじ「鉄アレー」で体力の養成をしようとおもふ諸君は勢ひ修文館製造の「鉄アレー」によらねばなりますまいどうか一ポンドより二ポンド、三ポンドより四ポンドと上る度ごとにご〳〵御注文を願ひますと欲ばつてる者は

一貫五百目迄へ小包郵便にて送りますそれから上は運送法御指定の上御注文ください

大阪市南區順慶町通三丁目五番屋敷

修文館 鈴木常松

明治三十五年三月二十三日印刷

明治三十五年三月二十八日發行

太宰府名所諸奥付

著者 松尾光淑 福岡縣福岡市博多中島町九番地

發行者 辻本卯藏 大阪市南區心齋橋通一丁目六番屋敷

印刷者 淵上松太郎 福岡市博多中島町

發賣所 積善館支店 大阪市南區順慶町心齋橋北へ入

發賣所 修文館 大阪市東區安土町四丁目

發賣所 積善館 廣島市塩屋町

發賣所 積善館支店

不許復製

門司

門司市棧橋通り

古賀文旅館

本館ハ瀛車瀛船共乘降御便利ニ

御座候

御旅館

明治館

博多下新川端町

電話百四十五番

壹等旅館

博多屋

當旅館は博多停車場を距る僅か六丁且つ室内の清潔なる又夜具料理向等は衛生上注意を加へ旅客に對し取扱親切なる事當館の特色なれば續々御投宿被下度奉願候

博多下新川端町廿六番地

旅館 荒井藤枝

電話六百三十六番

長距離加入

川卯旅館

不相變御投宿ノ程願上候

馬關外濱町

門司棧橋通

川卯

川卯 敬白

追而來ル四月ヨリ馬關停車場構内ニ支店開設營業仕候間御引立ノ程祈入候

弊館ハ停車場最近ニシテ瀘車ノ便又瀘船ニモ御乘降ニ最モ便利且ツ客室器具ノ清潔宿料ノ低廉待遇ノ懇切ハ弊館ノ特色ナリ

門司港町

山田旅館

御旅館

利

熊本綿屋事門司支店

柳邊旅館

電話五十四番

門司港

停車場前

八坂旅館

福岡縣筑前國福岡市荒戸町（字通町）

出雲大社福岡分院と圖書館

祭神　出雲大社　大國主大神　造花大神三柱
天照皇大神　產土神

千早振神代に天の下所造し冥事知食す

出雲大神の天日隅宮の分靈の今や東西洋融通の開運に際し我西北端支韓に打向ひたる關門の福岡に此鎮祭ある豈偶然ならんや抑も此分院は明治廿六年二月より新築の事發起あり仝廿八年十月起工式行れ仝卅年五月廿五日輪奐の造營成功を奏し千家管長下向開院式祭典擧行せらる嗚呼此經營や彼征清の役に伴なひ土木を起し上下士民淨財を献し工事を促す彼靈臺の古へも物の數ならず子の如く來り日ならず落成せり則ち本殿に出雲大社　大國主大神の御分靈相殿に造花大神三柱　天照皇大神產土神等を鎮祭せり地は福岡軍營の西門に隣近し則ち正面に神殿分院東に向ひ魏々千木高知りて立せ給ひ境内北方に神樂殿東に並びて雲陽館同南方に寶庫圖書館甍を並べて建連ね神門御手洗居宅等の壯觀あり

鎮祭に際し希代の神異を示し給ふそは三十年五月廿四日千家管長門司に着港あるや御分靈を旅館の階上に遷奉らんと唐櫃の蓋を開くや全く其時刻に適中して福岡新築分院に於て東方より二つの火球大空を翔り來り神殿に入り給ふに其境内完然白晝の如く光輝赫燿せりとぞ之を拜せし人々は堂々たる吏員士人等にて決して兒女輩の曖昧の言に非るなり於是人々神奇を畏み地方の信仰日に月に倍し信仰盛に趣けり嗟畏しこ神威の著るしさを仰べし

福岡圖書館建設の事は去明治三十三年一月に發企し爾後孜々として經營する處ありしが文部省は其擧を納れて直ちに數百部の書籍御下賜あり縣下有志者は擧つて之に賛同せられ又各縣の有志者も遙かに援助賛成せらるゝありて金員或は書籍を寄贈せられ其額積て數千圓に上り會員數は一千五百有餘名の多きに達するの盛況を呈したり僅かに二星霜を過ぎざるに此の如き盛運を得たるは必竟有志諸君の厚意と熱心に此れ因るものなれば發起者は其有志者の熱誠なる賛同の意に背かざらんことを蘄ひ拮据擴張等に盡粹し大社敎分院地内南方に於ける二層樓造りの建築に着手し其工事も畧ぼ竣成を告んとするに至りたれば來る五月頃には開館の運に至らしめ以て各有志者の好意に酬ひ併せて敎育上に於ける發起者の微意を表せんことを期す

福岡大社敎分院長
福岡圖書館々主　廣瀨玄鋹

旅館

弊館ハ福岡市ノ中央ニアリ

弊館ハ食具寢具ニ注意シ且ツ賄ヒ向キハ衛生ヲ專ラトス

弊館ハ玄海洋ニ又肥筑ノ山野ヲ遙ニ望ミ風景佳絶ナリ

福岡市橋口町

榮屋

電話三十三番

福岡市長松下直美君題字

積善館編輯部編

福博みやげ

口繪ニハ市街圖及ヒ寫眞版數葉挿入
菊判半裁全一冊
正價金 錢

舊き歴史を有する丈け名所古蹟に富める福岡博多の地を四方に紹介せんが爲めに書綴りたる案内記にして世の此類の著書と全く選を異にし其記事は啻に古文書の敍事に止まらず實際の記述を網羅せるを以て之れを神中の珍璧となさば座ながらにして福博の樣子が掌に取る樣に明了すべし文章は極く平易にして何人にても了解易く其言廻はしの間に無限の趣味を帶はしめ濡衣塚畔には佳人を泣かしめ多々良濱邊には壯士をして劍を按せしむる底の筆法を用ゐたり福博人は必ず精讀して燈臺礎暗しの譏を免るべく遠來の人は必ず一本を購ふて福博のみやげとなすべし

發賣所

福岡市博多中嶋町九番地

積善館

（長距離加入）電話四十三番

入江政憲君
三原種一郎君
小川時君　共編

福岡縣案内

本書ハ福岡縣ニ於ケル商工業ノ大勢ト縣内各所ニ散在セル神社佛閣名所舊跡ノ所在及其ノ歴史沿革ヲ編纂シタルモノニシテ其概目ヲ摘記スレバ左ノ如シ

本縣地圖（名所舊跡神社佛閣物産炭坑其他詳細ニ明記セリ）

本縣ノ位置、本縣ノ商工業、商事會社、銀行、諸工場、諸市場、輸出入商品原價、營業戸數人口、著名市街戸數人口、縣下重要物産、縣下實業組合團体、筑豊五郡石炭統計、石炭鑛區二十三年以來門司港ヨリ外國輸出石炭數量年次比較調、其他名所舊跡五十ケ所ノ歴史沿革

以上概目ニ依リ商工業ノ大勢實力ハ一目瞭然タルヲ得殊ニ統計上ノ計數等ハ正確ナル材料ヲ根基トシタルモノナレバ更ニ誤謬ナキハ著者ガ保證スル所ナリ尚各地ニ散在セル名所舊跡ニ就テハ文章簡明ニシテ直チニ其ノ歴史由緒ヲ知ルヲ得ルナリ本書ハ獨リ本縣人座右ノ參考トシテ稗益アルノミナラズ他縣人ト雖モ一度來リテ本縣實業ノ大勢ヲ見其ノ實力ヲ知リ尚縣下ニ散在セル名所舊蹟ヲ探ランスルモノヽ必須缺クベカラザルノ書タリ且ツ携帶ニ便ナル小冊子トシタルヲ以テ眞ニ本縣ノ案内書タル名ニ背カズ江湖諸君幸ニ一閲ノ煩ヲ賜ハラン事ヲ

口繪寫眞版數葉入
菊判半裁　全壹冊
正價　金
郵税

發行所　福岡市博多中島町九番地　**積善館**（電話四十三）

文學士高津鍬三郎君序文有馬曉著

言文一致

少年文集

定價金十五錢
郵税四錢

洋裝頗美本
全壹冊

これまで、言文一致の書物は、澤山でましたが、その内で、これが丁度少年諸子によかろーとゆーのは、なるよーにおもゐます、そこで、せんせーがたが少年諸子に、適するよーに、かゝれたのを、いろ〳〵と盛裝して、發行しましたのが、……言文一致少年文集。

巖谷小波先生序
福田琴月先生著

新夢お伽噺

二人浦島

豈僕堂拾珍
郵税二銭

浦嶋は一人かと思つたら、二人あるとは妙なおはなしだ、處は同じ丹後の水の江、大浦嶋が歸りのおそさに、小浦嶋の大心配、とう〳〵亀でなく蛸にのつて、龍宮の魚類に談判するといふ比類なき面白きお話しを、こゝに御披露、さあ評判じゃ〳〵

附録
牛の星
洋裝頗美本
全壹冊

新夢お伽噺

鬼と豆藏

琴月著
耕雲画

くひしん坊の鬼が二匹、よせばよいのに節分の晩、町を歩いたその口の中へ、ピョイと飛入る豆藏が、鬼の上前はねた罰で、とう〳〵雪責火責にあふといふて、も面白いお伽話、さあさ皆さん讀んだり〳〵

附録
鼠と玉子
洋裝頗美本
全壹冊

琴月著
耕雪画
新夢お伽噺

牛若丸

定價金拾錢

天狗の鼻をへこました、御曹子牛若丸が、五條の橋で大坊主の、大薙刀をたゝきおとし、後には大した大將となる至極いさましいお話しを、よまぬ坊チャンは、強い人にはなれませんよ。

附錄
花ちゃん

洋裝頗美本
全壹冊

新夢お伽噺

狼退治

琴月著
耕雪画
定價金拾錢

「咲いた、咲いた、ヤレ、咲いた、枯木に花がヤレ咲いた」とはやし立てられ狼共が、面白がつてゐる其間に、とう〳〵犬に退治せられた、といふお噺。

附錄
白玉黑玉

洋裝頗美本
全壹冊

發賣元
大阪市東區心齋橋順慶町北入
修文館

新著お伽噺

桃栗三郎

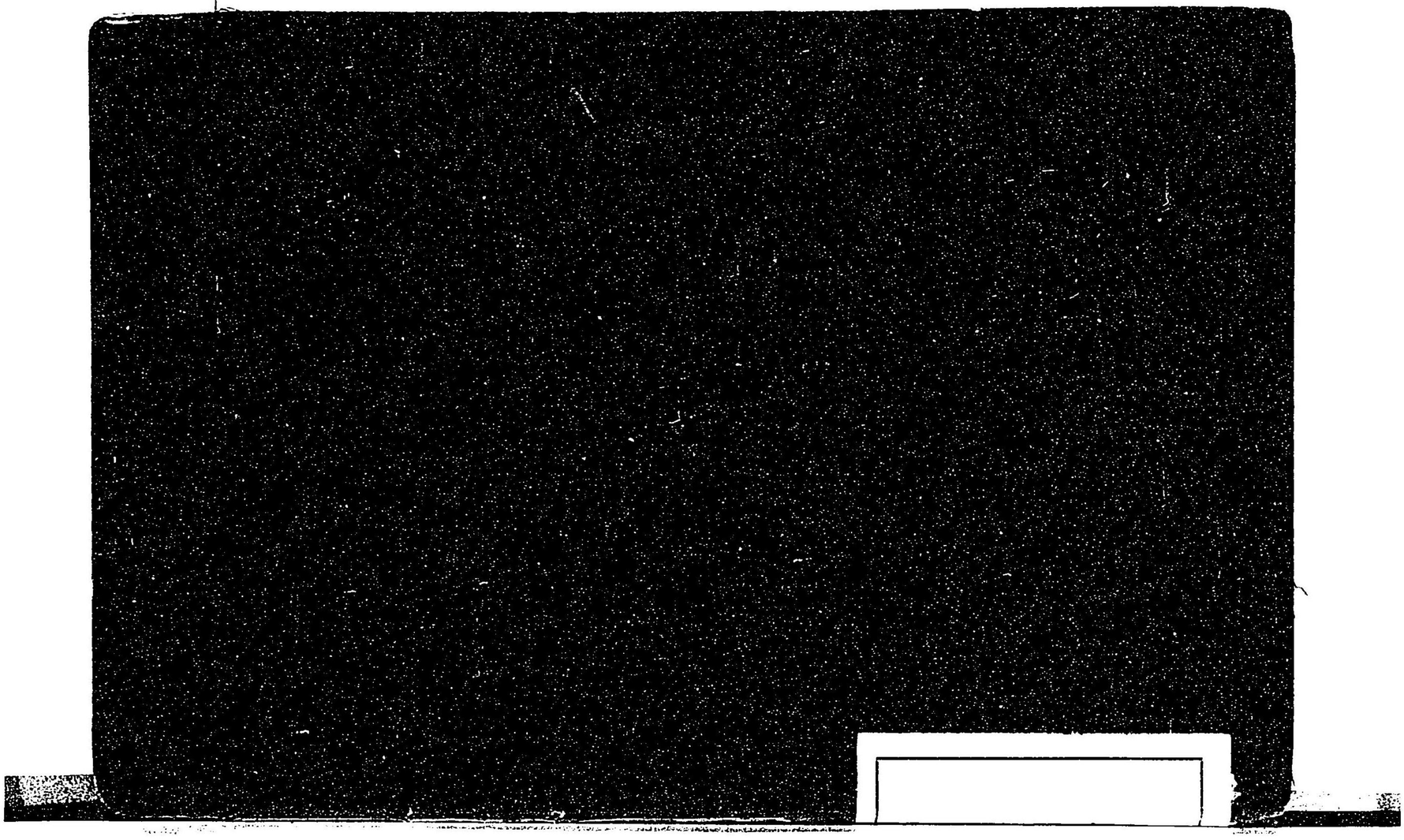
琴月菴 著
耕雲亭 画

桃栗三年柿八年柚は九年の花ざかり九年どころか三千年の命をのばす大事の桃を鬼にとられた其仇討に猿と一處に鬼ヶ島へ渡つて目出度凱陣する、でも勇ましいお話しは、これ。

附録
葦の湖の大蛇

洋装頒美本
全壹冊

82
434



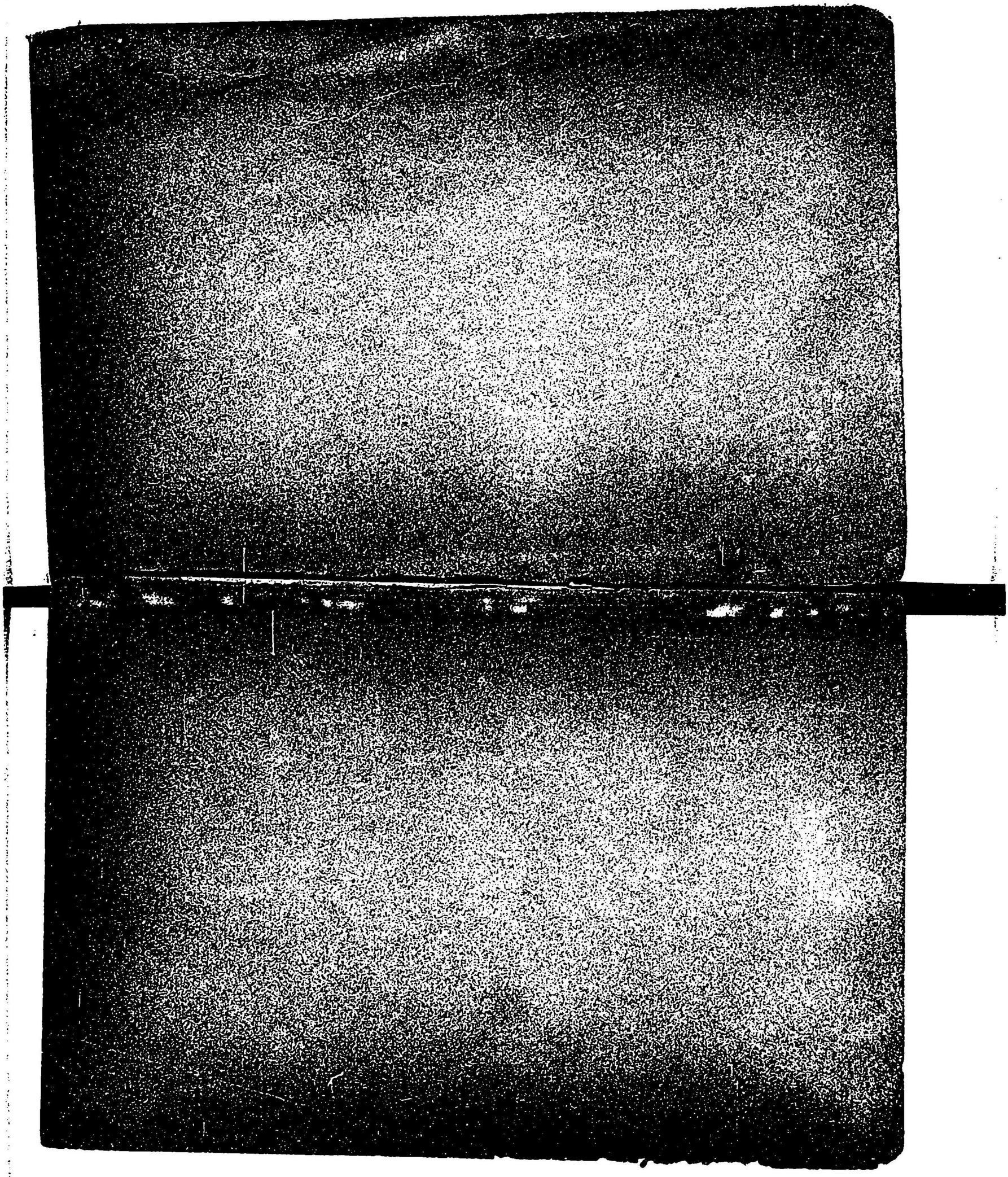
82
434

026232-000-5

82-434

太宰府名所誌

松尾　光淑／著

M35

ADC-3959